神話を受け継ぐ者達　～人間の価値観が創りだした世界の中で～

焔

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
神話を受け継ぐ者達　～人間の価値観が創りだした世界の中で～

【Ｎコード】
Ｎ６５４５Ｓ

【作者名】
焔

【あらすじ】
神と怪物と人間。
人間の価値観から生み出されてしまった三大勢力がぶつかり合う世界。
荒波万（あらなみよろず）は学校からの帰り、その勢力の一つからの使者と名乗る女に出くわす。
「あなたは私たち、神、人間のどこに付くか決めなくちゃならない。この世界ではそうしないと生きて行けないの。どうする？」

人間と怪物の力を受け継いでいるという事実を知った荒波は、この世界の全貌を知った。
神話の時代から続く終わりなき戦いに向かう荒波は少しずつ自分自身のことを理解していく。

プロローグ（前書き）

はじめまして！焔です。
僕の他の作品を読んでくれた方はお久しぶりです。
まだ小説を書き初めて日も浅いのですが温かい目で読んでください！

プロローグ

人間は不思議な価値観を持っている。
人の姿に近いものを味方と思い、醜い生物のことは恐れ、敵と認識する。
そのせいで人間は昔から『悪魔』や『雪女』に騙されやすい。
いや、この『醜い』という表現も人間の価値観だ。
角があるから――――――。カブトムシや山羊にもある。
体表の色が違うから――――――。人間にだって黒人や白人はいる。
人間が住めない様なところに住むから――――――。水の中に住んでいる貝や魚はどうなんだ。
その姿で生まれたからにはそれなりの理由があり、やるべきことがある。
その姿を一つの種族にどうこう言われる筋合いはないはずだ。
それなのに人間は私たちを遠ざけ、罵り（ののしり）、地方の奥地へと追いやった。
他の生物たちは私たちのことを受け入れ、共存してくれるのに。
人間だけが、人間のみが私たちのことを受け入れない。
その存在を目で確認した人たちは、自分の体験したことを信じようとしなくなる。
歴史は伝説に、伝説は昔話や神話になった。

◆◆

１９世紀初め。
人間はどんどん生活を豊かにしていった。

夜の暗闇や静けさ、森や林、生き物が決して立ち入らない私たちの安住の地は、どんどん人間の科学の波に呑まれていってしまう。
気づいたときはもう遅く、人間の生活にはもう私たちが介入する隙は無くなっていた。
今まで通りの生活が出来なくなった私たちは絶滅するのか？、一時期そんな考えが広まり、不穏な空気になってしまった時はさすがにもうだめかと思った。
だが、どこかの一族が新しい考えを呼びかけ始めた。
そう、人間が共存しようとしないなら、私たちが人間と共存しよう。
それは私たちに生き方を変えろ、といっているような物だった。
受け入れた種族はたくさんいたが、人間に狩られていた種族や人間を食料にしてきた種族はやはり悩んだ。
しかし結局、1ヶ月ていどですべての種族は覚悟を決め、人間の街へと進出していった。

◆◆

そして現在21世紀
人間は生活を豊かにすることに歯止めを掛ける気はなかった。
自分たちの利益で動く生物へと成り果てた人間。
海は汚染され、排気ガスに満ちた空や酸の雨。
私たちは怒っていた……。

プロローグ（後書き）

引き続き1話をお楽しみください。

0-（1）終わりと始まり（前書き）

0-（1）終わりと始まり

夜の闇が深まり、月が顔を覗かしたときだった。
城の前に腰を曲げた老人が立ち、1段低いところに数人の人影があった。
しかしだからといって、人間とは限らない。肌の色や耳など人間には似つかわしくないようなものが多数見られた。
そのうちの一人が前に出た。
「報告します。東の夜空で星達が不思議な形をつくっています。やはりあの前触れでしょうか？」
隣の若い男も進み出た。
「月の陰(かげ)りも妙です長老、普通じゃありません」
長老と呼ばれた老人は空を見上げた。月明かりが長い鼻に反射する。
「時が来たか――――――――。迎えの者が必要じゃ。行ってくれる者はおるか？」
「私が行きましょう！」
高い、女の声。
声が聞こえたのは長老の目の前ではなく、隣の木々の間からだった。
「その役目、私が請け合いましょう」
明るい月の下に進み出たその姿は、若い女性。
「彼女で良いのですか長老？」
「彼女ほどこの役目に適した者はいない……どこにいるにか分かっているのか？」
「もう調べはついています。明日中には接触出来るでしょう」
「そうか、気を付けるのじゃぞ」
「はい」
夜の静けさが戻る。

月が雲に隠れた。

◆◆

～4月15日～

今日は下駄箱だった。

「おい秀才、待てよ。俺らは用があるんだ」

いつも通り彼らは逃げ道をふさいで話しかけてきた。

集団にならないと一人の人間に話しかけられなく、ケンカを売ることも出来ないという弱い者たちだ。少なくとも荒波(あらなみ)はそう思っていた。

「退(ど)いてくれない、通れないんだけど」

いつも通り返す荒波。

「せっかく俺らが靴の中に入れ説いた画鋲(がびょう)を、どうして取っちゃうのかなぁ？」

俺ら、か。やっぱり一人ではやってないのか。そう思い、荒波は微笑む。

「分からないのか、刺さると痛いからだよ」

「そんなことを聞いてるんじゃねぇよ！」

金髪のピアス顔が荒波のすぐ近くまでくる。かすかに臭うのは煙草の臭いだ。もちろんこの学校の校則違反になる。もっとも荒波だってすべて守っているわけではないが。

「ボンドでしっかりくっつけて、気づかれないようにしたのになんで靴を履いてられるか聞いてんだよぉ」

聞かなくても、ペラペラと手口を話してくれる。

「靴底を取替えたんだよ」

「はあ？　おまえ靴底の代わりなんか持ってきてるのか？」

「偶然だよ」
嘘だった。荒波は前々から予測していた。
一昨日はただ砂や石が入っていた。昨日は画鋲がたっぷり。だから今日か明日には画鋲を取れないようにするはずだと予測して、わざわざスペアを持ってきていた。
完全に戦略勝ちだった。
「チッ、帰るぞ」
引き時と感じたのか、彼らは帰っていった。
「――――――――バカだな……」

◆◆

下駄箱を出ると日がだいぶ西に傾き、空は赤く彩られていた。
「はあ、毎日毎日こりもせずに、ご苦労だねぇ」
そう、毎日続いているのだ。中学校の頃から今、すなわち高校1年生の春までずっとだ。
彼らはまず、頭が良くてむかつくという理由で寄ってきて、虐めを始めた。
荒波の他にも友達が少なそうな生徒が何人もやられた。
最初は荒波も、当然彼らを憎んでいた。本気で怒り、罵(ののし)ったりしたこともある。
だがある日無駄だと分かった。
そのうち彼らの嫌がらせパターンも分かってきて、騒ぎにならないように解決するのが容易になってきたのが中学1年の冬のこと。
もともと彼らはそれほど頭が良くなかったのに対しこちらは学校一の頭脳、勝敗は見えていた。
「良い天気だなぁ、どっか寄っていこうかな」
靴に画鋲をいれられた後にこんな言葉が出るようになったのも、

相手の手の内が見えているからだ。
相手がチョキを出すと分かっているジャンケンに悩む奴もいない、それと同じだった。
「CDショップか、それとも家に帰るか、うーん……」
学校一の頭脳だからといって、成績維持のために勉強三昧と言う訳じゃない。荒波は授業を聞いているだけで情報がすべて頭の中に入る。テストはそれを思い出して書く。それだけだった。
だから家で勉強なんかしたことが無く、宿題なんかは学校でやっている。家にいる母親も咎(とが)めたりはしない。
結局、家に帰ることにした。
母も待っていることだろう、そう思い、帰路につく。
これが荒波の日常。
代わり映えのない平和な、つまらない生活。
だがそんな生活は終末を迎える。
すべてが終わり、始まる。
見慣れた通学路が今日は夕日のせいか赤く染まり、荒波の目には何かの前触れのようにも見えた。

◆◆

住宅街の間をを若い女が歩いていた。
髪は赤く、手には1枚の写真。
「これが目標か。回収すればいいのね。」
写真には若い青年が写ってる。
だが彼女はその男の名前を知らない。いや、知らされてなかった。
歩いていた住宅街を抜けると大きな公園がある。
彼女はそこで目標を見つけた。

◆◆

荒波は公園の中を歩いていた。
荒波の家はこの公園を抜けた先にあるため、公園の外側の道を通るより公園を抜けた方が早いのだ。
今日も正面に見える出口を通って帰るつもりだった。しかし――――――。
（これはどういうことかねぇ……）
その出口の前に女性が立ちふさがっていた。
（高校生？　大学生？　それくらいの年だよな。うちの高校の生徒か？　でもあんな赤い髪の生徒、気づかない訳ないしなぁ）
自分の中で質問ばかりを繰り返す。
しかもこちらを見てきている。
（なに、俺に用があるのか？　あんなところに陣取られると通れないじゃないか！　用がないならどけてくれよ）
歩いているためどんどん距離が縮まる。
だが途中で止まると気を悪くするかも、という考えが捨てられない荒波は歩き続けるしかなかった。
「ねえ、君――――――」
話しかけてきた。やはり荒波に用事があったようだ。
しかしそれと同時に疑問も浮かんでくる。
すなわち、なぜ用事があるということだ。
荒波は彼女に会ったことはない。別に目の前でゴミを捨てた訳でも、踊り出した訳でもない。
荒波も思春期の青年だ。美人でスタイルも良い外国人っぽい（髪が赤いから）女性に声を掛けられるのは嫌じゃなかった。
だが、次の言葉でその考えたちは虚空の彼方へ消え去ることになる。

「――――――が、八岐大蛇（やまたのおろち）の子孫なの？」

「……はあ？」

その言葉にどう反応すればいいか分からなかった。

（ヤマ、タノ、オロチ？）

八岐大蛇の子孫。もちろんそんなことは聞いたこと無かったし、そんなあだ名も存在しない。

荒波は必死に脳内辞書のページをめくる。

真っ先に思い浮かんだのは8本の首がある伝説の生物だが、それではないと思った。きっと違う意味だ。

（もしかして店の名前なのか、それならあり得る）

『子孫』という部分をキレイにぶっ飛ばして、納得できる答えを導き出した荒波は質問してみた。

「八岐大蛇ってなんですか？」

「知らないの！？　いや知らされてないのか……」

知っていて当然、みたいな答えが帰ってきた。

「八岐大蛇って知らない？　八（はち）に岐（き）に大きいに蛇（へび）で八岐大蛇よ」

「い、いや知ってますけど、それの子孫って……」

「君が八岐大蛇の子孫なの！」

パチン！

そのとき、何かが変わった。

今の言葉は暗示を解くキーワードだったのだろうか。頭の中を駆けめぐる血流の勢いが川の用に流れる。

意識の中で組み立てられていく映像（ビジョン）。

「そう、なんですか？」

「信じない？」

「いや……信じますよ」

この場を乗り切るために無理矢理納得したわけではない。荒波の中のもう一人の荒波がそう言っていた。俺は八岐大蛇の子孫だと。

さきほど、もう一人の荒波は目覚めていた。そして荒波は納得した。
人生の分岐点では立ち止まっていられない。
「そう。納得してくれて良かったわ。じゃあ一緒に来てくれる？」
はい。そう言おうとして思いとどまった。彼女はまだ信用出来ない。
なによりもう一つの自分がそう言っている。まだ目覚めて5分も経っていないが自分なら目の前の女の人より信用は出来る。
「どこに行くんですか？　というかなんで行かなきゃならないんですか」
相手を刺激しないようにするつもりだったが、本心が出てしまう。
「ある人に君を迎えにくるよう頼まれたの。だから一緒に来て」
「悪いけど……あなたと一緒には行けません」
「……そう、残念だわ……」
彼女は道を開けた。
行けという意味だろう。
「じゃあ、ありがとうございました」
そう言って、荒波は公園を後にした。
だが疑問は続いていた。
（何で俺はこんなに冷静でいられる？　それになんだこの感じ、誰に話しかけられてるんだ？）
「ホントに残念よ……。君がいなくなるなんてねぇ！」
ボンッと言う音が荒波の背後から聞こえた。
（避けろ！！）
唐突に頭に声が響く。
荒波はとっさに右に転がった。今までいた場所を、赤い何かが通過する。
「なんだ！？」
それは炎だった。炎がボールのように丸くなりながら、荒波を襲おうとしたのだった。

炎は電柱に当たり、火花を散らせながら消える。
「おまえか！」
荒波は怒りむき出しで振り返る。、
「あら、避けたの。残念ねぇ……」
そこには予想どうり、彼女が右の手のひらを向けて立っていた。
4月だというのに蜃気楼をまとって。
「おまえは俺を迎えに来たんじゃないのか！」
「そうよ。だけどこちら側に来ないと言った場合、あちら側に付く前に消さなきゃならないの。ごめんね」
「こちら側とかあちら側って、何の話をしてるんだよ！」
「君が知る必要は無くなったのよ」
ボンッと言う音と共に炎使い女の右手の上に火がともり、夕闇になった住宅街を照らした。
（さあて、どうする俺）
「はあ！」
かけ声と同時に火の玉が荒波を捕らえた。スピードを上げ、どんどん近づいてくる。
（おいさっきよりデカいぞ、どうすんだよ俺！）
「避けて！」
左の方から声がした。
声のする方に跳躍する。火の玉はすれ違うようにYシャツの袖を焦がすも、直撃は避けられた。
（誰だ？）
その人は立ち上がろうとしている荒波の前にかばうように立った。
「用済みなら私たちがもらうわ、危害は加えないで。」
突然の現状を理解できない荒波は取りあえず立とうとするが、
「少し下がってて」
逆に押し戻された
「君も迎え……なのか？」
「よく偽物に騙されなかったわね、八岐大蛇の子孫さん！」

振り向いた一瞬の横顔からは爽やかな笑みが読み取れた。

0-（2）踏み込んだ世界（前書き）

0-（2）踏み込んだ世界

少なくとも目の前の女性は、味方のようだった。
だからといっても荒波はこの危機を脱したわけではない。まだ危険な状況に代わりはなかった。
助けに来た彼女は荒波をかばいながら炎使い女に話し始める。
「さぁ、八岐大蛇の子孫はこちらが保護するわ。さっさと神達の場所に帰りなさい！　さもないと――――――」
「さもないと、どうなるのかしら？」
彼女は見せつけるように右腕を外側に向かって振る。次の瞬間には彼女の手に槍が握られていた。
いや、槍と言うには少し短かい。
（短槍！？　どこから？）
長さが腕の1．5倍ほどしかないその槍を炎使い女に向ける。
「この短槍（たんそう）に切り刻まれることになる」
彼女は言い切った。私が勝つと。
「フッ、怪物もどきは所詮神には勝てない、これ常識よ」
「じゃあ、今あなたの常識を塗り替えるわよ、ガルーダの末裔さん！」
言い終わると同時に一気に距離を詰め、短槍を横に払う。
炎使い女はこれを後ろに飛び、避けた。
「はあ！」
今度は炎使い女が火の玉を繰り出す。荒波をねらったときと同じモーションで。
彼女はこれを飛んでやり過ごした。逸れた玉が奥の草原を焼いていく。
「1発だけじゃないわよ！」
炎使い女の手から、次々と打ち出される火の玉の行き先は跳躍した彼女の着地点だった。

「くっ」
当たるかに見えた火の玉を彼女は短槍で弾く。
そして続く二発目を短槍で軌道を変え、その勢いで右に転がる。
短槍を構え、狙いを絞った。
「はあぁぁ！」
彼女は、打ち出した体勢のまま硬直している炎使い女に、両手で短槍を突きだした。
ビュオ！　、と空気が裂ける音がする。
炎使い女は短槍が当たる寸前、なんとか身をひねって躱(かわ)した。
だが、硬直から無理矢理体をひねったため、よろけて後ろに下がる。
彼女はそれを見逃さなかった。
「あぁぁあ！！」
突きだした短槍から左手を離し、右手で短槍を掴んだまま体全体で右回りに回った。
短槍は炎使い女の腹の辺りに斬りつけられた。
服が切れた。
「残念、切れたのは服よ」
「そうなの？　私には手応えがあった様に感じたけど？……」
炎使い女は気づいたのか、腹の辺りを見る。
服が切れた方から、少しずつ赤く染まっていく。浅くではあったが斬りつけられていた。
「――――――っ！」
「どう？　まだ続ける？」
炎使い女は手から火を出しながら身構える。
しかし目線は違うところに向けられていた。
死んでも命令は完遂せよ、これが神達からの残酷な命令。
「無駄よ、今彼に火の玉を放っても避けられる」
「えっ……！？」
「彼はさっきの攻撃を至近距離で避けた。そして今彼の中に流れる

八岐大蛇の血が目覚めつつある。今そこに立ちつくしている彼に火の玉を放っても９９％避けられるわよ」
彼女には狙いが分かっていた。
物陰に隠れもせず戦いをずっと見つめた荒波に攻撃をしかけて、自分の命と引き替えに命令を遂行しようというやり方はもう見飽きていた。
「チッ！」
荒波に向けていた火の玉を彼女に放つ。
当てようと思っていたわけではない。悔し紛れの行動だった。
彼女は短槍を振り、火の玉を弾く。
「逃げなさい、帰ったらどうなるかも知らないけど、私は手を下さないわ」
しばらく情けを受けるかどうか考えていたが。
「はあぁ……」
炎使い女は腹を押さえながら立ち上がる。
「分かったわ、今日は退く。預けておくから大切に扱いなさいよ。」
炎使い女は一気に飛び上がり、住宅の屋根に降り立つ。
「またいつか逢いましょう」
そういって屋根の奥に姿を消す。言ったとおり彼女は追いかけなかった。
「えぇそうね、逢えたらいいわね……」
どこか別れを惜しむような言葉は荒波にも分かった。
「どう？、これが私たちの世界！　ここに足を踏み入れてしまったの」
荒波の方に振り返りながら、彼女は話し始めた。
夕日が沈んだ。

◆◆

「何者なんだあいつ、追いかけなくて良かったのか？」
荒波は彼女の方に歩いてくる。
右で止めていた茶髪を下ろす。髪は首付け根辺りまで届いた。
「彼女にはもう逢えないわ、たぶんね」
「神達の場所に、とか言ってたな。あいつも神なのか？」
「そう、厳密に言うと神と人間の末裔――――――――」

「――――――――そして私たちもそう、怪物と人間の末裔。あなたは八岐大蛇でわたしはサラマンダー、こういうこと」

怪物と人間の末裔、聞いてもそれほど驚かなかった。
「おどろかないの？」
「もう知ってたし、俺の中のもう一人の俺がそう言っている気がする、おかしいよな。」
だが本当のことだ。荒波を沈めているのは荒波自身。
「おかしくなんか無い、私たちに遭遇したから、今まで封印されてきた八岐大蛇の血が目覚めつつあるのよ。八岐大蛇の力を受け継いでいるから何が起こっても不思議じゃないわ。」
「八岐大蛇ってあの首が八つある蛇だよな、それと人間との子孫ってどういうこと？」
「今生きている人間のほとんどは信じていないけど、八岐大蛇は実在してる。いや、八岐大蛇だけじゃない、河童だって天狗だってドラキュラだって、私の祖先のサラマンダーだって実在してる。」
そう、怪物たちは昔から実在していた。
しかし人間はその存在を認めようとしなく、お話でしか伝わらなかった。
「私たちの先祖を含めた生き物たちは、１９世紀の中頃から生きるのが厳しくなっていった。人間がすみかを奪い、姿を見たら殺し、痛めつけられたからよ」

彼女の言葉には力がこもっていた。静かに聞いた。
「そこで先祖達は生き残るために、人間と共存することにした。人間に友好的になり、山奥の村なんかで一緒に暮らしていたらしいわ。その中で人間と子どもを作っていったらしい」
「子供って……それが俺やおまえかみたいな能力を持っているのか？」
「全員って訳じゃないわ。先祖の能力や力によっては全く人間と変わりない個体も生まれる」
「今に至るわけ、分かった？」
「……分かんないよ」
「……ごめんね。一から十まで説明できないの。とりあえずあなたの家にいくわよ、いろいろ親に話さないと。あなた名前は？」
「荒波万（よろず）だ。君は？」
「七瀬火蓮（ななせかれん）よ」
「分かった、じゃあまず後始末しないか？」
「え？　なんの？」
「燃えてる公園だ」
荒波は公園の中心にビシッと指を向ける。指の向こうには草原（くさはら）が広がっているはずだったが半分に火が付いていた。
「なんで燃えてるの？」
「ふざけるなああ！！　七瀬とあの女の戦いで燃えたんだろうが！」
「なに？　荒波君が消しなさいよ」
「どうやってだよ！」
「あんた八岐大蛇の力持ってるのよ、たぶん水出ろ、って思えば水出るわよ」
「えっ、ホントか？」
少しうれしそうに返事を返す。
荒波は改まって自分の手のひらを見つめる。
（さっきの女みたいに手から水がでたらかっこいいなぁ）
手のひらを下に向ける。

そこから水道の様にちょろちょろと出る物だと思った。
（水出ろ！）
軽く思っただけなのに、バシュッと音がして指先から勢いよく水が出る。ホースの口を押しつぶしたみたいなスピードだった。
そして指先は七瀬の方を向いていた。
水しぶきが飛ぶ。
「あわわわわぁぁぁ」
やばいと思い、すぐさま水を止める。
「ご、ごめんな。初めてだったから、ははっ」
笑ってごまかそうとする荒波。
だが……。
「あ、れ？」
荒波は分かった。これは笑ってごまかせる範囲じゃないと。
七瀬の胸元。
そこは水で濡れ、厳重な守りは意味をなさない物となっていた。
「……初めてにしては上出来だったわよ荒波君、少しやり方が違ったようだけど」
「えっ、七瀬はこれがわざとだと思っているのか？」
「私はサラマンダーの血のおかげで炎を自由に使えるのよ」
もう荒波の言葉は聞こえない。

◆◆

数分後。
荒波は髪とYシャツを少し焦がされたが生きていた。
「だあ、はあ、はあ、死ぬだろう！」
「良いからさっさと火消しなさい！」
まだ少し頬が赤いが、七瀬の服は自らの能力のおかげで乾いてい

た。
今度は狙い通り指先から水が噴き出し、すこし安心した。
思えば女の子とこんなに騒いだのは初めてだった。
（なじめそうだな……）
学校が全くなじめなかった荒波にとっては、ささやかな幸せに思えた。
２０秒ほどで消し終わる。
「さてと、俺の家行くんじゃないのか」
「そうそう、忘れてた。荒波君家（ち）どこ？」
「説明すんのめんどくさいからついてこいよ。」
荒波は公園の出口に向かって歩き出す。その後を七瀬がついてくる。
公園の出口を目の前にして、ふと炎使い女を思い出す。先ほどまでここで話をしていたのに何故あんなことになったのだろう。
「なぁ、そういえばあの炎使い女、ガルーダの子孫って言ってたよな。ガルーダってインド神話の炎のように光り輝く鳥みたいな神様だろ。なんで俺を襲うんだよ」
「そうよ、ガルダやガルラ、迦桜羅（かるら）とも呼ばれているわ。八部衆って知ってる？」
「仏法を守護する８神のことか？　ってまさか……」
「そう、神達も人間との間に子どもを創ったのよ、でも私たち生き物と神は敵対しているから気を付けて」
「なんでまた……人間に追いやられた同士じゃないのか」
「人間に対する気持ちが違うのよ、神達は人間達を完璧に敵だと認識している。地球を今でも汚し続けている害虫だとね」
「害……虫？」
「それに対して私たちは人間と共存しようとしているから、自然に神達とは離れるようになった。まあ、例外もいるけどね。それに荒波君の敵はまだいるわ」
「はっ？まだいるのかよ。誰？」

「あなたと同じ人間よ、荒波君。人間のなかにも神や私たちの存在を認識している者達がいる、そいつらはきっと荒波君を仲間にして他の勢力に対抗しようとして寄ってくるわ。」
「もしかして君たちは友好的にしているのに、人間が無視しているてこと？」
「そんな感じよ。人間の中には私達の申し入れを断り人間がこの世界の頂点だと考えてる人がいる。私はあなたを助けたけど選択権はまだ荒波君にあるわ」
街灯の下でいきなり止まり、女の子の可愛い指先が荒波の鼻の前まで来る。

「あなたは私たち、神、人間のどこに付くか決めなくちゃならない。この世界ではそうしないと生きて行けないの。どうする、荒波君？」

0-（3）送別と襲撃（前書き）

0-（3）送別と襲撃

「それは今答えないとだめか？」
「今すぐとは言わない。でも長引くのは禁止よ」
「分かった」
「でも、神側はオススメしないわ。神達が荒波君を狙っている本当の理由は仲間にしたいからじゃない、始末したいからよ」
「始末って、それじゃあ仲間になれないんじゃないか。選択肢の中に含まれないんじゃないのか」
「そんなこともない、さっきのガルダの末裔のように頼み込めば仲間になることも可能よ。ただし――――――」
「ただし、なんだよ？」
「荒波君は殺される。神達は人間も私たちも勢力を伸ばすことを好んでいない、使うだけ使って切り捨てられるわよ。たぶん、あのガルダの末裔もね……」
急に七瀬は俯き、言葉を閉ざした。
「そんなに簡単にか？　命令をこなせなかっただけで殺されるのかよ！　そんなの許されてるのか？」
「許されてるのよ！　現にたくさんの子が殺されたわ。私が神の手から助けたのに……」
「……ごめん、七瀬はそれを何回も見てきたんだな」
ふと荒波は七瀬を見て気がついた。
七瀬は何か遠くを見ている。
「見るなんてもんじゃない、あれは……」
「あっごめん、これが俺ん家だ」
タイミング良く、住宅街の奥にある二階建ての家を指さす。
荒波は道に面した階段を上がり、ドアの前に立つ。
「上がってこいよ、母さんと二人暮らしだから遠慮はいらない」
わざと明るい声を出す。

出会ってまだ1時間も経っていない女性に気を遣う。
荒波は人生発かも知れないことをしていた。

◆◆

「ただいま」
「おじゃまします」
二人の声が同時に響く。
「あら、遅かったじゃない。お友達まで連れて、今日はどうしたの？」
台所からエプロンを着けた一人の女性が出てくる。
もう４０近いのに、まだまだ美貌を損なわない顔立ちはどこか荒波に似ているような気がする。
「初めまして、万の母の荒波美砂です」
「母さん、彼女は七瀬火蓮、じつは今日……」
今日の帰りのことから順に説明しようとするが、その前に七瀬が切り出す。
「八岐大蛇のことでお話があります」
（なにっ！　いきなり一般人の母親に向かって初っぱなからなんてこと言うんだ！？）
シリアス展開ぶちこわしの悪口を心の中でぶつけながら、どうフォローするか考える。
されど美砂は全く動じず、こんなことを言った。
「そう、万も知っちゃったわけ……。あの人が言ってた来るべき時ね」ほらボーっとしてないで入って。万、火蓮ちゃんを居間に案内して」
美砂は言うだけ言って、居間に入る。昔から理解が極端に早いと思っていたが、もはや荒波も訳が分からない。荒波美砂を理解するのは難解だろう。

「あなたの母親、飲み込みが早いわね。ホントに人間？」
「バカなこと言うな、ほら、居間はこっちだ」
美砂の向かいのソファーに並んで座る。
「さて、じゃあ何から話してくれるのかしら、それとも私から？」
「まず、何があったか説明します」
七瀬が先導を切ってくれた。
それから15分ほどは今日のことを話してくれた。
「そう、火蓮ちゃんが万（よろず）を助けてくれたの」
「はい、それから私たちのことを荒波君にお話ししました、あなたにもお話しした方が良いでしょうか？」
「いえ、大丈夫です。主人からほとんどのことを聞いております」
「えっ、父さんが！？」
「そうよ、あの人はすべてを知っていたわ。本当に凄い人だった……。ちょっとお茶を持ってくるわ、待っててね」
美砂は急に立ち上がり、台所に走っていった。
「あ、お構いなく……」
「安心しろ、美味しいから」
「いや、そんなこと心配してる訳じゃ……」
しばらくすると美砂が紅茶を持って戻ってきた。
「さあ、どうぞ。火蓮ちゃんは砂糖とミルクいる？」
「ありがとうございます」
手渡されたビンから砂糖を取り、紅茶に入れる。その数……。
「3つもかよ！」
荒波が驚いて、七瀬を見る。
「ごめんなさいね、うちの家系はみんな砂糖を入れないのよ」
「そんなに驚かなくても良いじゃない。は、恥ずかしいわよ」
七瀬は紅茶で顔を隠しながら飲む。
「熱っ」
「あらあら、大丈夫？」
「あ、すいません……」

そんなやり取りを隣で見ていた荒波はというと……。
（あれ？　可愛い……）
顔が良いのはさっきから分かっていたが、紅茶のカップを持ってフーフーしているところはなかなか絵になっていた。
「やっぱり俺、思春期かな？」
素朴な疑問を抱くのもなんだか幸せに感じた。
「ではごちそうさまでした――――――――じゃあ、荒波君。準備して、出かけるわ」
「どこに？」
こんなに楽しいお茶は久し振りだった。もう少し満喫したい。
「今から私たちの街に行くわ。そこなら安全よ」
「……えっ、俺も行くのか？　今すぐ……か？」
七瀬は静かに首を振る。
「今すぐ。あなたが覚醒した今、ここにいたらあなたの母親も危ないわ。家を出る」
始めから予感はしていた。二つの勢力に追われている今、安全なところに身を隠すのは当然だ。
「私に気を遣わないで万（よろず）、こうなることもあなたが生まれる前からあの人に聞かされていた」
「分かった、ありがとう……。じゃあ準備しなきゃいけないな、七瀬！」
「ちょっと待って、携帯が」
七瀬はポケットから携帯を取り出し、耳に当てる。
「はい、えぇ、はい、分かりました」
必要最低限の返事しかしないため、二人には何のことかよく分からなかった。
通話を切り、真剣な顔になる。
「誰からだ？」
「仲間から……。悪いけど、ゆっくり準備してる暇は無いわよ。」
片手で素早く携帯をしまう。微妙に見えた画面には、七瀬と１０

歳くらいの男の子が写っていた。
「何かあったのか？」
「敵が来る、今すぐここを出ないと。必要なものだけ持っていくわよ、余計な者は必要ない」
「オッケー、３０秒で済ませる。靴履いててくれ！」
そう言い、荒波は二階に駆け上がる。
「……少し荒っぽいことになるかも知れません」
玄関に行く前に美砂に告げる。荒波と危ない橋を渡るということ遠回しに伝えたつもりだった。
「息子をよろしくね、火蓮ちゃん。大丈夫、万（よろず）はあの人のように強いから」
「はい」
（ここにはしばらく戻ってこれない、母親もそれが分かった上での覚悟なのね）
ガタガタと階段を駆け下りてくる音がして、荒波が現れる。
腰にはさっきまで無かった小さいポーチを付け、茶色いジャンバーを着ていた。
「じゃあ行くか」
「ちょっと待って万（よろず）、これを持って行きなさい。」
美砂が差し出したのは手のひらに乗るくらいのとても薄い物だった。
荒波は受け取って気づいた。
（堅い！？、だけど重くない……。材質がなんだか見当も付かない。）
だいたいの物質の情報が詰まっている荒波の頭でも、金属か合成（プラス）樹脂（チック）かも分からなかった。それほど不思議なものだった。
「母さん、これは？」
「……あなたの父親の鱗よ」

「お、俺の父さん……」
「そんな、荒波君の父親が八岐大蛇なの!?、ホントに?」
事実を知った荒波よりも七瀬の方が明らかに驚いていた。
「そう、あの人。荒波都牟刈(つむがり)は八岐大蛇よ、この家を出て行くときに2枚くれた。1枚は私に、1枚はあなたにね」
「ちょっと待って、じゃあ子どもの頃から見ていた写真の男の人は誰?」
そう、その写真を見ていたため荒波は、八岐大蛇の血はきっと曾祖父母やその前から流れ込んできたのだと思った。
「あれも父さんよ、あの人は私たちといるときは人間の姿で居てくれた。だから周りにもばれなかったのよ」
「そうなんだ、ありがとう。これですっきりした……。行ってきます」
「本当はその長い髪を切ってあげたかったんだけど……」
荒波が玄関の扉を開ける。夜の空気が顔をなでる。
「行ってらっしゃい万(よろず)」
本当に満面としか言いようがない笑みで送ってくれた。荒波は扉が閉まるまで、母親の送別(そうべつ)を見続ける。
ガタン。
「さよなら、母さん……」
しばらく戻ってこれないと考えていたのは荒波も同じだった。
これが最後かも知れない。その予感は荒波の胸を締め付けていた。
「何してるの!早く行くわよ、追っ手は車なんだから」
「じゃあこっちもそれに対抗すればいい」
そう言って、親指をガレージに向ける。

◆◆

夜の風が二人の髪を靡(なび)かす。
二人は青く輝くオートバイに乗って国道を走っていた。運転してるのは荒波（無免許）。
「免許持ってるの？、荒波君」
「ああ？　騒音のせいで質問が聞こえませーん！」
「質問を変えるわ、どこで運転の方法を教わったの？」
「アメリカの叔父さんのところに居たとき。半年間みっちり教わったから、そこらのライダーよりうまいぜ！」
「凄い自信ね、まあおかげでいろいろ使わなくても追っ手から逃げられたし」
信号が赤になり、ブレーキを掛ける。
まだ8時くらいなので車の通りも多い。街はまだ活気があり、繁華街からの音は冷気を震わす。
「いやあ、父さんが八岐大蛇だったなんて驚いたよ、俺てっきりずっと昔に混ざった物だと……」
「ほとんどの人間との子孫は4世代以上前の血が混ざってる。その能力が偶然発達している子孫が私たちの仲間になるの。私だって4世代前と2世代前の二つの血が入っているけど、親が別の生物っていうのは初めてよ」
「じゃあ、俺は珍しいのか？」
「今世紀になってからは、人間と子どもを作った生物は格段に少なくなった、だから凄く珍しいのよ。他の人にばれたら厄介ね」
「もしかして神や人間も知らないんじゃないかな」
「その可能性は否定できない、このことは他言無用よ、分かった？」
信号が青になり、前の車が動き出した。
「了解した」
了承すると同時にバイクは動き出した。
「ねえ、それよりホントに髪の毛長いわね。私より長いんじゃない……？」
七瀬は首の中程なのに対し、男子にしては長い荒波の髪の毛は荒

波の方の付け根当たりまで伸びていた。
ちょっかいを掛けられる原因にもなっていたが、荒波はさらさらの自分の髪が密かに自慢だったのだ。
また顔立ちもそれほど男っぽくないため似合わないこともなかった。
「そんなに長いか？」
これ以上言われたくもないため、ヘルメットの中にしまう。
今荒波は国道をずっと南に走っていた。
行き先は荒波も良く分からない。七瀬に国道を南にずっと行くように言われたのだ。
なんでも普通の人間は入れない森の奥に安全な場所があるらしい。
曲がって欲しいときは七瀬が教える手はずになっていたが、荒波にはそれ以上に気になっていることがあった……。
（もうちょっと離れてくれないかなぁ……。バイクに乗るのは初めてって言ってたけどこんなに、いやたしかにしっかり捕まってろよとは言ったけど……）
このバイクはそんなに大きくないので二人乗りをしたらお互いの体が触れあう。問題はそこではない。
七瀬はバイクから落ちないように荒波の腰に腕を回していた。そこもそれほど気にはしなかった。
問題は国道に入りスピードを上げた時に七瀬が体を密着させてきたことだった。
（ああくそっ、背中の感触のせいで集中力が消えてく、なんだこの破壊力？　見たときはそれほど大きくないと思っていたのが間違いだったのか！　人生初のハッピーで事故ったらどうしよおおおお！！）
荒波は思春期特有の欲望と戦っていた。
「ねえ、気づいてた？」
耳元でいきなり声がした。
「はいっ！？　……あ、ああ黒いワゴン車のことか。あれだけ敵意

丸出しだぞ、気づいてくれって言っているようなもんだろ」
「荒波君も敵意が感じられるようになったのね。さっきから思い悩んでるようだったから、もしかしてと思ったのよ」
おまえのせいだろ！　という言葉は出さず、現在の状況を打破する方法を考える。
「やつらは車が少なくなったら何か行動を起こす。それまでは大丈夫よ」
いつの間にか海に沿うように走っていた。道路も二車線しかない。
確かにまだ前には車が４台ほどいるし、すれ違う車も見掛ける。少し安心した。だが……。
「なあ七瀬、バックミラーがおかしく無ければ黒い車の助手席から出てるのは拳銃でしょうか？」
七瀬も振り返る。
「こんなとこで襲撃？　逃げられるの？」
「やるしかないだろ！」
荒波は一気にアクセルを捻った。

0-（4）THE　STUNT！

バイクが速度を上げると同時にキン、という金属音が響く。
「おい、警告無しに撃ってきたぞ！　俺を仲間にしたいんじゃなかったのか！？」
「神たちと同じ考えのようね」
「仲間にならないなら殺そうってか？　まだお誘い受けてないんだけど……」
「私たちが、彼らの存在を分かってて逃げてるってばれたのよ」
「そういうことか……」
何で？　という言葉を飲み込み、ハンドルを右に切って弾を避ける。
また銃声が響く。
バリンと音がして、右のバックミラーが割れた。
「あいつら本気で殺す気だな」
「そんなこと分かりきってるじゃない！」
「これ見ろよ」
七瀬に渡したのはバックミラーにめり込んだ弾だった。まだ熱を帯びている。
「それ、ロシア製の７．６２ミリ弾だ。それが装填できるロシアの拳銃っていえば、『トカレフＴＴ－３３』しかない。殺傷能力が高くて危険な拳銃なんだよ。」
「それもアメリカで覚えた知識？」
「そういうこと、でも大丈夫だ。拳銃は凄くても使っているやつが下手だからな」
周りの車もいつの間にか姿を消していた。
「適当に撃ってれば当たるサブマシンガンとか持ってくれれば良かったのにねえ」
少し余裕になってきた荒波はこの状況か楽しみつつあった。アメ

リカでのことがやっと役に立つと思った。が……
「――――――ねえ、ワゴン車のボンネットが開いて、大きい筒が出てきたんだけど」
「筒だと！？　ちょっと待て七瀬、教えてくれ。その筒の銃身は一つか？」
「違うわ、六つはあるわよ。アレ何？　マシンガンなの？」
周りを見渡すと、右側は海。左側は山を削ったコンクリートの壁。逃げ場なし……。
車の上の人影が笑いながらトリガーを引く。
「それはガトリング砲だあああ！！」

荒波の叫び声は銃声によってかき消された。
ダダダダッという軽快な音と共に雨のように弾丸が降り注ぐ。
荒波はその中を猛スピードで走り抜けた。
バイク1台にガトリング砲なんて、子供のケンカに釘バットで乱入するようなものだ。
バイクの後を追うようにコンクリートに穴が空く。
（なるほど、逃げ場が無くなる道に入るまで奥の手は隠して置いた訳ね、これは本格的にやばくなってきた）
「くそっ、ちょっと傾くぞ！」
二人の行く先には右急カーブが見えていた。
時速は今１００キロぐらいだろうか。当然、スピードを落とさなければ普通に曲がれない。普通には……。
「ちょっと速度落とさないの？　ぶつかるわよ！？」
「しっかり捕まってろよ！」
荒波はカーブにさしかかると同時に、これでもかと言うほどハンドルをきる。
「だあああああああ！！」
二人を乗せたバイクは尋常じゃない角度でカーブを曲がっていた。その角度、およそ４５度。遠心力で頭が吹っ飛びそうだった。

なんとかカーブを曲がりきる。
「へっどうよ！」
「殺す気？　私の足と道路の間、３センチもなかったわよ」
「大丈夫だ、追っ手は車だからな。このスピードで曲がれるわけがない」
質問と違う答えをする荒波は勝ち誇ったようにスピードを下げ、後ろを向いた。
そこには曲がりきれなかった車がひっくり返っている……と思っていた。
ギャギャギャッ！。
荒波は驚愕（きょうがく）する。
追っ手はワゴン車の左タイヤをコンクリートの壁に乗り上げさせた体勢でカーブを曲がっていた。つまり、右タイヤは道路、左タイヤは壁につけ二人と同じ体勢を作り出していた。
もっと簡単にいうと、曲がれてしまったのだ。
「あいつら、しつこすぎるだろ！」
どんどんアメリカの映画のようになっていた。
素早く速度を上げ、距離を取る。だが、ガトリング砲の射程からは逃れることはできなかった。
「くっそ、やばいぞ七瀬、ここからまっすぐな道が続いてる。うぐっ、いつまでも避け続けられないぞ！」
既に何発かはバイクに当たったりヘルメットを擦ったりしていた。蜂の巣になるのも時間の問題だ。
「このままじゃ持たない、何とかならないか？」
「私が何とかするわ、まっすぐな道が続いてるなら姿勢も安定する。しっかり運転するのよ」
「大船に乗った気でいろ！」
七瀬は車に向き直り、そして……。
「我が中に流れる灼熱の炎、形状は盾――――――――」
七瀬の肩から腕にそって炎が流れ、最後は手の中に…

「どんな弾も通さない強固な盾となれ！――――――――」
握りしめた手から灯りが漏れる。
「――――――――『防護火炎（プロテスフレイム）』！」
七瀬の右手の先かの炎が盾を形作る。盾は当たった弾を燃やし尽くしていった。
「間に合って良かったわ」
「そうだな、あと何分持ちこたえられる？」
「バイクがどれくらい直進していられるかによるけど、目的地が近いから大丈夫よ、次に見える脇道に入って！」
追っ手はいっこうにあきらめる気配が無い。弾もいつ切れるかも分からない状況だった。
「これはさっさと安全な道に入った方が良いな！」
ハンドルを握力の最大で握りしめる。
「七瀬、直進は終わりだ。早くつかまれ！」
「もうそろそろよ、崖の手前だから。」
「崖っ！　じゃあどうにかなるかもな」
又カーブが迫る。
「……あとは俺に任せとけよ……」
「う、うん……」
つぶやいただけなのに、凄く重みがある。この人に任せれば本当にうまくいくんじゃないか、そう感じる言葉だった。
荒波は道の向こうに立ち入り禁止の立て札が見えた。そしてその手前には小さいが確かに道がある。
「七瀬、ちょっとした離れ技だ！　しっかり捕まってないと振り落とされるぞ！」
腰に腕の力がかかったのを確認した荒波は賭にでた。今しかできない賭だった。
荒波は海沿いの道を崖に向かって突き進む。減速は一切しなかった。
まるで脇道なんかないように。

バイクは脇道に差し掛かり、通り過ぎるかに見えた。
「はあああああああああ！！」
荒波はありったけの力を込めハンドルを脇道に向ける。それと同時に前に全体重を乗せ、地面を蹴った。
後輪が浮く。浮いた後輪は捻(ねじ)られた前輪と直線になるように勢いのまま回る。
前輪を軸にする。これが１００キロものスピードを出しながら相手に脇道の存在を隠し通す方法だった。
成功するかは荒波にも判断がつかなかったが、これにはもう一つのねらい目があった。
荒波はブレーキを使わなかった理由の一つは減速をすると追いつかれてしまうから。
そしてもう一つは、相手を倒すため。
あれほどの重量の車が、１００キロのスピードで急ブレーキを掛けても５０メートル近くは止まれない。
荒波のもう一つの目的が、相手に崖があることを悟られないことだった。
目の前を走り去る車の上からは、もう笑った顔は消えていた。
「悪いな」
車はエンジンの音だけを残し、崖の向こうに消えた……。

◆◆

「七瀬、バイク限界だ。動かない。」
銃弾を受けていろんな場所が壊れてるし、前輪のタイヤはすり減ってパンクしていた。
「そんなことより怪我はないの荒波君？　大丈夫？」

ヘルメットを取ると中に入れていた髪が解放される。汗のせいで湿った髪は首元から離れない。
「全然だ、ただ少し……疲れたよ」
手近な木の根元に座り込む。
荒波の黒い瞳からは光が少なくなっていた。
「ごめんね、私がもっと先に能力を使ってれば……」
「七瀬は悪くないよ。良く分からないけどバイクの上じゃ姿勢が安定しないんだろ、使って足手まといになるよりは良かったんだ。七瀬の判断は正しいよ」
少し行き過ぎるくらい励ました。今は心配して欲しくなかった。
「さてどうするんだ、安全地帯は遠いのか？」
「あと３００メートルくらい歩ければ私は入れる」
道の先は木々と暗闇のおかげでよく見えない。どんな安全地帯なんだろう。
「でも荒波君は入れないわ、一種の結界が張ってあって長老が認めないとその結界は通れないのよ」
「その長老とやらは呼べないのか？」
「もともと予定の時刻を大幅に過ぎているし、携帯はやられたのよ」
七瀬の赤い携帯は弾がめり込んでいた。
「じゃあ野宿だな！」
「えっ、野宿！？　……まあ朝になれば長老も来ると思うけど」
「今日は寒くも暑くもない、追っ手は退けたし動物も出ないだろう、心配することなんか無い！」
「あんまりこっち来ないでよ！」
「１歩も歩けないほど疲れた俺が変なこと出来るわけ無いだろ、というかそういう趣味じゃない」
「もう！　おやすみ！」
七瀬はさっさとそっぽを向いて寝てしまった。
「――――――たくっ……痛み増してきたんだ。そっちまで行けるはず無いだろ」

荒波はゆっくりジャンバーから左腕を引き抜く。
「痛っつ……意外にひどかったんだな、擦っただけだと思ったのに……」

◆◆

七瀬の寝息が聞こえる。
（もう寝たかな）
Tシャツは左の二の腕が赤く染まっていた。弾は体内にないようだったがガトリング砲の弾は予想以上に荒波を苦しめていた。
荒波はTシャツの右袖を歯で破り、左腕を縛った。これでこれ以上血が流れることはない。
次に指先から水を出し傷口に掛けて血を洗い流す。
「うあ、ぐっ……」
七瀬にこれ以上悔やませない、そのため故（ゆえ）の行動だった。
七瀬には今日助けてもらった。つまらない学校生活から解き放ってくれた。これだけ感謝出来ることをしてもらったのに、この傷を見せたら自分を攻めるだろう。
七瀬だって初めて乗ったバイクの上で能力を使うのは無理があった。
それに弾が当たったのは自分の不注意も原因だ。七瀬は悪くない、そう思い隠し通していたわけだ。
今度は下からTシャツを破り、傷口に当てる。
今はこの程度しかできなかった。
（はあ、格好つけるんじゃなかったかな）
寄りかかっていた木から上半身が右に倒れた。
痛みが荒波を蝕（むしば）んでいく。
そのまま荒波の意識は薄れていった……。

◆◆

枝や葉からの木漏れ日が目を差す。

「う、うん？」

荒波は朝の光を感じ取って体を起こした。

昨日、あのまま寝て（気絶？）しまったらしい。まだ昨日に木に寄りかかっていた。

ふと荒波は木とは違う感触を左手に感じた。

まだ半分寝ぼけた頭でコレは何かと考え、まだ重いまぶたで確認する。

そこには荒波に寄り添うようにして七瀬が寝ていた。

「……おわあああ！　――――――っん」

悲鳴を上げてから、自分の口を塞ぐ。

今起きられてはまずい。

落ち着いてきたところで状況の分析を始める。すなわち、なぜ七瀬がここに寝ているかだ。

昨日七瀬は少なくとも４メートルくらい離れていた。寝相が悪くてもここまではこれないだろう。

自分の意志で隣に来るのは七瀬の気持ちを考えれば絶対にあり得ない。

「矛盾してる……」

だが、荒波はもう一つの重要な矛盾を見つけた。

（なんで、左腕に包帯が巻いてあるんだ？）

荒波は昨夜、傷口に布を当てたまま気を失ったのだ。しかも、包帯なんか持っていない。

答えはすぐ分かった。
「そうか、あの時起きてたのか……ありがとう七瀬」
七瀬の指先からは左手と同じ、ツンとした臭い。ポーチからはビンや包帯がはみ出していた。
（余計なお世話だったかな？）
気を遣ったつもりが、逆に迷惑を掛けてしまった。七瀬の方が一枚上手（うわて）だったのだ。
荒波は自分のジャンバーをそっと掛けてやる。
（こうしてみると綺麗な顔だよな）
いつのまにか七瀬の寝顔をずっと見てしまってた。
荒波と同じアジア系の肌。髪の毛は軽いパーマなのか顔の輪郭（りんかく）にそって伸びている。
自然と笑いがこぼれてしまう顔だった。
もう、彼女は他人ではない。

0-（5）長老捜しと待ち時間

「おはよう」
七瀬の声がして、海を見ていた荒波は振り返った。
「あ、おはよう」
「誰か来た？」
「誰どころか、生き物も来なかったぜ」
「この辺は結界のせいで生き物も寄りつかないのよ」
「なるほど。で、これからどうする？」
「結界のすぐ近くまで行くわよ荒波君」
「分かった、バイクは持って行っても良いかな？」
「大丈夫よ」
七瀬も荷物をしまい始めた。どういう仕掛けになってるのか、ポーチにはランプやらシートなどがスイスイ入っていく。
荒波はすぐ近くに包帯が落ちていることに気づき、手を伸ばした。
「あ、……」
取ろうとした包帯を七瀬が先に取り、ポーチに入れようとする。だが急いでいたのか手のすきまから又落ちてしまった。
「ほら、落としたぞ」
「あ、ありがと……」
居心地悪そうに受け取った七瀬はそのまま顔を背(そむ)けてしまった。
「こっちこそ、ありがとな」
荒波はそれだけ言う。他に言ってもたぶん聞いてくれない。それだけで気持ちが伝わるなら、感謝の言葉は一言で良かった。
「……い、行くわよ！」

◆◆

「ここから先は荒波君じゃ無理よ」
「えっ！？」
「この木から先は結界になっていて長老が認めないと入れないんの、だから無理」
七瀬が指した木から先も別に歩いてきた道と変わらなかった。
「ホントに結界なんかあるのか？」
「結界が目に見えたら、ここに入り口がありますと言ってる様なものよ。目に見えなくて当然」
でも荒波にはここが特別には見えなかった。
「俺はてっきりレンガを叩いたらその奥に道が出来るとかそういうものだとばかり……」
「映画の見過ぎ、じゃあ私長老呼んでくるからその辺にいて」
そう言い残し、七瀬は歩き出した。そして問題の木に差し掛かったとたん……。
「あれ？　……」
消えた。残像を残したり足からだんだん消えたのでもなく、本当にパッと消えてしまった。
奥に見える道には誰もいない。
そして、荒波はあそこには入れない。
「俺……どうすれば良いんだ？」
最大の悩みだった。

◆◆

七瀬もすぐ帰ってくるなら良かった。又は３０分で戻る、と言われればその辺を探検でもしながら３０分後にここに居ればいい。
しかしいつ帰ってくるのかも分からない相手を待つにはここにい

るしかない。時間だけが過ぎていく。
荒波は道の真ん中に座り込んで、七瀬が消えたあたりをずっと睨んでいた。
にらみ続けてから1時間が経とうとしたそのとき、突然目の前に人が現れた。
一瞬、七瀬かと思ったが違った。同い年くらいの男だった。
最初に目に付くのはトゲトゲの髪の毛だ。
ワックスで固めているとしてもこんなトゲトゲになるだろうかと疑問に思う。
（こいつが長老か？　でもそんな雰囲気じゃないよな）
とりあえず尋ねてみる。
「おまえ、誰？」
「えっ！？　いかにも怪しさ満点のおまえから問いかけられるとは思わなかったぜ」
「あ、すいません」
考えてみれば荒波は道の真ん中に座り込んで男を睨んでいたのだ。どう見たって怪しいのは荒波の方だった。
「あの、あっち側からきたんですよね、長老って知ってますか？」
「長老？　あ、おまえもしかして七瀬が連れてきたっていう八岐大蛇の子孫か？」
「そうなんですけどそこの結界を通れないんですよ」
「へ！？　……だからそこでずっと待ってたのか？　大変だったな」
そう言い、隣りに座り込んできた。
「俺は針沢（はりざわ）、針沢上彦（かみひこ）だ。年は１５」
「荒波万（よろず）、よろしく。俺も１５歳」
「同い年かあ……。分からないことがあったら何でも聞けよ、俺が力になるぜ。」
荒波には心強い言葉だった。学校ではこんなこと言われたことがない。
集団に入らず、ほとんど友達なんかいなかった荒波。

そんな荒波には同い年の友達ができたのはうれしかった。
「針沢も違う血が混じってるのか？」
まずは自分と同じ話題から語りかける
「そう、俺はヤマアラシの血。２世代前に混じったらしい。」
「だからそんなに髪尖らしてるのか？」
「当たり、ヤマアラシの血が原因なのかこうなっちゃうんだよ」
ハハハと軽く笑う。あまり気にしてないのだ。
「へえ、俺まだ人間じゃないやつと血縁関係にある人、二人しか会ってないんだ」
「ああ、ガルーダの女だろ。襲われたんだって？　大変だったな。怪我無かったのか？」
初対面の人にこれだけ心配してくれる人も珍しい。人が良いのだ。
「大丈夫だったよ、七瀬も来てくれたしね」
「しかし、『神の血縁（ゴッドブラッド）』だけじゃなく人間も襲ってきたんだろ？いつもはこんなに苦戦しないんだぞ」
「俺ってそんな重要なのか、水を出せるだけでたいした能力も持ってないよ」
「まあ、血縁関係があの八岐大蛇だからな。記録をみても八岐大蛇の子孫は見たこと無いんだぞ、大切なのはその水を使ってどんな技が繰り出せるかということだ」
「俺、水を指先から出す以外やったこと無いぞ」
「荒波なら訓練でいくらでも伸びる、大丈夫だ。俺も訓練で伸びたからな」
「針沢はどんな能力を持ってるんだ？」
「俺の力は実践したほうがわかりやすい」
針沢が前に向かって手首を振る。
ビシッと音を立て目の前の木に針が刺さる。
「すごいな！」
「へへっ」
鼻の下を擦るという、実に分かりやすい喜び方だった。

針沢の指の間にはまた針が挟まる。
大きさは5センチほど。白と黒が床屋の看板のように合わさっていた。
「長さは任意で変えられる、出し入れも自由自在だ」
荒波の目の前で針が消えたり現れたりする。
「どこに隠してるんだ？」
「うーん……荒波も出来ると思うけど、だいたい俺らは自分に合った武器を体内に収納できる。七瀬も短槍を閉まってたんじゃないか？」
「そういえば……本当に俺らは普通の人間じゃないんだな……」
自分に合わない学校からも抜けられた。つまらない日々からも解放され、自分の知識も役に立てるところに来れた。
だが荒波は未練を残さずきっぱり捨てることなんて出来なかった。
「……そんな顔するな。こう生まれたからには必ず理由がある、やるべきことも。それをこの結界の奥で見つければいい」
「……ああ、がんばるよ」
「俺はさ、人間が嫌いなんだよ。七瀬から俺らの歴史は聞いたか？」
「昨日話してくれた」
「俺はこう考えてる……。人間がこの世界の創造者だとな」
「人間が？　なんで？」
「これは俺の考えだから正解とは限らない、一人の意見として聞いてくれ……人間が俺らの先祖を差別したから神や俺らの先祖が争うことになった。逆に言えば人間が俺らの価値を認めてくれれば今は絶対変わっていたと思う。」
荒波も同感できた。この間まで人間側にいたが、いざこちら側からものを見ると考えが変わるものだった。
「この世界は人間の価値観のせいで創られたんだ」
「人間、の……価値観か。なるほどな」

「そんな深く考え込むな、おまえが悪いわけでもないんだから。」
「でも考え方には深く共感できると思う。」
「そうか？　そんなこと言われたの荒波が初めてだよ！」
自分の考えを理解して貰えたからか、喜びの度合いは大きかった。
そろそろ日差しが上から差し込んでくる時刻になった。
「にしても七瀬の奴遅いなあ、荒波をいつまで待たせるんだか？」
「この中って広いのか？」
「この中には『ティリスミナリア』っていう街があるんだ。中心にお城があって周りには街が栄えている。大きさは東京都の４分の１くらいかな」
「広いなあ。そんな中で見つかるのか？」
「たいていの場合は城の中にいるんだぞ。でも今日はお出かけ中かも……」
「待つしかないか、ふあーあ」
荒波はあくびをして大の字に寝ころぶ。
頬に当たる草が少し痛かった。
「俺も暇だからつきあうぜ荒波」
針沢も寝る。
「これでも食べながら俺の話でも聞いてればいいんだ」
どこから出したのか笹の葉がくるまれた物を取り出す。笹の葉にはうっすらと文字が書いてあった。
「『ランマーマ』？」
「卵の白身に砂糖と果物をを入れて焼いたお菓子だ」
針沢が包みを開けると一口サイズの球形のものが湯気を上げていた。
「おいしそうだなあ」
荒波は朝から何も口にしていなかったことを思い出す。
「食べて良いぞ、たぶん今日は何も食べてないだろ？」
何から何まで気が利いていた針沢に感動しながらも『ランマーマ』を口に運ぶ。

「……おいしい！」
「だろ？　いろんなお店があるがこの店の『ランマーマ』が『ティリスミナリア』の中で1番うまいんだ」
針沢もその中から一つ取り口に放り込む。
「それでな、『ティリスミナリア』の中には他にもいろんな店があってな……」

◆◆

七瀬は『ティリスミナリア』の城下町12番区を歩いていた。
『ティリスミナリア』の形は一言で言うと円形だった。
しかし街があまりに広いため、城を中心に外側を8つ、そのさらに外側を8つに分け、合計16もの場所に区分けされていた。
「ここにもいない……全くどこ行ったのかしら？」
七瀬はまだ長老を捜し『ティリスミナリア』を歩き回っていた。
既に荒波と分かれて1時間が過ぎ、城の中だけでなく6つもの区画を探した。
それでもこの短時間で済んだのは偏(ひとえ)に『瞬間移動門(テレポートゲート)』のおかげだった。
各区の中心に1つずつ設置されている門は、潜(くぐ)る時に行きたい区画を言えばその区画の門に転送してくれるという優れものだ。
ただし転送は登録された人しかできない。
城下町で働いてる人や城勤めでもただの兵隊などは登録されておらず、登録されるということは城に認められたということになる。
登録されている人は『ティリスミナリア』の人口の分のほんの一握りだ。
又、城の中にも3つの『瞬間移動門(テレポートゲート)』が設置されており、それを使用できる人の数はもっと少ない。

七瀬も『瞬間移動門(テレポートゲート)』の使用が可能で、それを最大限に活用しながら長老を捜索していたが一向に見つからない。
事前の約束だと15日の夜に崖のすぐ近くで待っている、というものだったが昨日は予定が大幅に遅れ、会えなかった。
しかし今日もどこにも見あたらないなんて不自然だった。
出かけるなら誰かが知ってるはずだが、城の中に行方が分かる人はいなかった。
「今日に限ってどうしていないのよ！」
さすがに荒波を待たせすぎている。
(こうなったら1度荒波君のところに戻って、別の入り口から入るかしかなさそうね)
『瞬間移動門(テレポートゲート)』に向かおうとすると七瀬の携帯が震える。
出るときに持ってきたNEW携帯を開く。
SDカードは破損していなかったため予備の携帯に入れ替えたのだ。
表示された電話番号から相手を確認すると電話に出る。
「なに？」
『長老がお帰りになりました、用があるんじゃないですか？』
予想を翻(ひるがえ)す返答が返ってきた。仲間が長老を捜してると知ってわざわざ連絡してくれたのだ。
「……ナイス！」
携帯を閉じ、『瞬間移動門(テレポートゲート)』を潜(くぐ)る。
「転送！　城内三番目(サード)！」
次の瞬間、七瀬は城の大広間にいた。
『ティリスミナリア』の城に通じる『瞬間移動門(テレポートゲート)』には番号が振ってあり、1つ目は玄関近く、2つ目は訓練場、3つ目がこの最上階の大広間だった。
石畳の上を歩き、長老室を目指す。
城の最上階に位置する長老室に行くにはこの『瞬間移動門(テレポートゲート)』が1番近く、そのほかにも書物庫や中に何があるのか謎の部屋まである。

七瀬は廊下の曲がり角を曲がろうとしたとき知ってる顔に話しかけられた。
「あれ？　今帰ってきたの火蓮？　長老なら部屋にいたよ」
「綾(あや)こそ仕事は終わったの？」
「あんなの朝飯前よ、火蓮こそ早く新人君連れてきなさいよ」
「はいはい」
いつもどうりの会話をあまり気にせず終わらせる。
長老室の扉は城の最上階の奥にある
七瀬は扉を叩いた。
「七瀬か、悪かったな。入ってくれ」
老人の声は名乗る前に扉越しに誰かを当てた。
重い扉を開いて部屋に入ると、いつも通り長老が奥のいすに座っていた。
「長老、探しました。どこに行っていらしたのですか？」
「それは――――――――」
一時(いっとき)の沈黙。
「――――――――すまんかった。例の剣(つるぎ)の件ですぐ行かねばならなかったのだ。」
『例の剣(つるぎ)』。その言葉が意味することを七瀬は知っていた。
「あの剣(つるぎ)の所在が掴めたのですか？――――――――いえ、急用なら仕方がありません。それよりお急ぎ下さい。八岐大蛇の子孫が待っています」
「場所は分かっておる。七瀬、わしに掴まれ」
七瀬が長老の袖を掴む。
長老室が無人になった。

0-（6）鍛冶屋前の騒動

森の木陰で二人の青年が空を見上げていた。
もう荒波にする説明が思いつかない針沢と、針沢にする質問がもう出てこない荒波は青空の雲を数えるしかなかった。
「起きてるか？　荒波」
「おはよう針沢……」
「……よしっ！」
気合いに手を借りて針沢は起き上がる。
「七瀬はもう来ないと判断しよう、俺と一緒に来い！」
「えっ！？　どこいくんだよ？」
「他の入り口だ、結界が張ってないなら誰だって入れるだろ」
「！？　他の入り口があるのか？　なんだよ、最初からそっちに行けば良かった……」
「いやあ、実はそこ６０キロくらい離れてるんだよ。走っても２時間以上だし、荒波はまだ走れないだろ？」
「走れないって、針沢は何キロくらいで走れるんだよ？」
「だいたい俺たちは時速２５キロくらいが平均だ、もっと速い人もいるけどな。でも荒波はまだ無理だろうな」
そのとき肌が空気の流れを感じ取った。

「そんなことはない」

低い声がして荒波が振り向くと、七瀬ともう一人は背が高い人が立っていた。
いや違った。この人は歯がとてつもなく長い下駄を履いている。
髪は白髪だがその間から覗かせる目は赤く、年老いては見えたが老人とはいえない様な姿だった。
そして１番人間離れしているのは、銀色の髪の間から出る鼻だ。

長い。とにかく長かった。鼻が高くてもあんなには伸びないだろう。
やっと荒波は1つの結論を出した。
(天狗!?)
「覚醒し始めた今なら10キロ出せても不思議ではないぞ」
「長老!?　――――――――おはようございます!」
針沢は長老の存在が分かると深々と頭を下げた。
「え!?　あ……」
一応荒波もつられて頭を下げる。
「あれ?　針沢君、何でこんなとこに?」
「七瀬遅いぞぉ、その間に俺は荒波と友達になっちゃったじゃないか」
ニコニコ笑い荒波の肩に手を置いて引き寄せる。
「……まあ、こういうことなんだ、この人が長老さん?」
「さんはいらんぞ八岐大蛇の息子よ、よくぞ来たな」
「む、息子!?　荒波おまえ息子だったのか!」
なんか喜んでいる針沢
「良いのですか長老?　針沢君に教えて」
「大丈夫、他には秘密じゃがこの者も信頼における。二人で八岐大蛇の息子を助けて欲しいと思った故(ゆえ)の言動じゃ」
「長老、そんなに私目のことを信頼してくれているなんて……」
針沢は長老の言葉に深く感動し涙目になってしまう。
「フォッフォ、もう何かとお世話してくれたようじゃしの。仕事も忘れて付きっきりとは……」
「・・・・・・」
涙を拭き取っていた針沢はピクリと動きを止める。
「だあああああ!!、すみませんでした長老!」
又深く頭を下げると地面を蹴った。
瞬く間に3メートルほど飛んだ針沢は、木の間に消えていった。
相当慌てている。

「さて、まずは名前を聞こうか、八岐大蛇、都牟刈（つむがり）の息子よ」
「はい、荒波万（よろず）と申します長老」
「では荒波君、結界と『瞬間移動門（テレポートゲート）』を使えるようにする。少し待ちなさい」
長老は荒波のおでこのあたりにゴツゴツした細い指を当てる。
長老が口を小さく動かしてるのが見えるが荒波には聞き取れなかった。
最後に指先が光り軽い痛みを感じたがこれで終わった。
「後の話はわしの部屋でするとしようかの、七瀬と一緒に部屋に来てくれ」
長老は結界を通ることなく消えた。
「……今ってどうやったんだ？」
「長老は自分の力で瞬間移動（テレポート）できるのよ。私たちも結界に入れば転送されるわ、行きましょう」
荒波はあわてて追いかけた。

◆◆

次に目を開けたときには大きな噴水の前にいた。
荒波の後ろには『瞬間移動門（テレポートゲート）』、噴水の前には6番区と書いてある。
ここは大きな広場らしくそこから四方に道が延び、両脇にはお店が多く建っていた。
だいたいのお店は石造りの2階建てで、荒波が見た限りでは何だか分からないような店も多数あった。
（すごいなあ、ＲＰＧの中の村みたいだ）
周りに気を取られていて七瀬のことを忘れていた、そう思い周りを見渡す。

そこで荒波はやっと、城下町を見下ろす存在に気がつく。
「でぇっ、けえな……」
小高い丘の上にさらに巨大な建築物が乗っていた。
壁や城壁は汚れ一つ無く、日の光が白い色に反射しより美しく見える。
純白の『ティリスミナリア城』。
それが目的地だと分かるのに数十秒掛かり、急いで首を回す。
七瀬は意外と、すぐ近くの建物の前で誰かと話していた。
看板が出ているので店なのだろうと思い文字を読む。
「……鍛冶屋！？」
鍛冶屋なんて近代都会には存在しないため、荒波はゲームやお話の中でしか見たことがない。いや荒波だけでなく今の世の中、鍛冶屋の存在を知らないで一生を終える人も少なくなかった。
荒波は全体をじっくり見ながら近づいていった。
「あ、来た来た。荒波君ちょっとこっち来て」
「はい？」
とりあえず七瀬の横に立つと、向かい合うようにいた1人の女性の鋭い視線が向けられた。
「紹介するわ、この人が新人の荒波万君（よろずぐん）。八岐大蛇の子孫で15歳よ」
よろしくお願いしますと頭を下げる。一応礼儀を重んじて挨拶したつもりだったが女性の鋭い視線は変わらなかった。目線は荒波の顔や服装を見ているようだった。
さすがに荒波も何かまずいことでもしてしまったのか心配になる。
「可愛いじゃない。女の子？」
「……え？　俺のこと！？」
「ちょっと、それは言っちゃだめよ――――――たしかに髪が長くて女の子に見えなくもないけど……」
「おい七瀬、そこは否定して欲しいんだが……」
つまり二人して荒波のことを女の子っぽいと思ってるということ

だ。
荒波だって、男としてのプライドくらいある。しかし髪も自慢だ。
「どっちかを捨てない限り、この連鎖は続くのかあああ？」
髪の毛を切ろうかと本気で考えてしまう。だが女性の不意の一言が襲う。
「いや、顔も女みたいだぞ。美曲線ってやつか？」
「結局顔もだめなのか……」
ガックリと肩を落とす荒波。
「まあ荒波君、そんなに気にしないで……」
「ご、ごめんな。そんなに気にしてたとは……」
さすがに言い過ぎたと言わんばかりに二人は頭を下げる。
「大丈夫……慣れてるから……」
しばらくシリアスな空気が続いた。

◆◆

「あたしは晴菜綾（はるなあや）よ。よろしくね」
「ちょっと私が紹介するから黙ってなさい！」
間を少しおいて、自己紹介かと思ったらいきなり二人のケンカが始まった。
「そんな起こらなくても良いじゃない、今回はあなたも狙ってるんでしょ？　いつもなら新入りの方は迎えだけで、後は放っておいてるのに同い年で人相が良いからって……」
「ちが……長老に部屋まで連れてくるように言われたのよ！」
「ホントかなー？　いつもより断然仲が良いじゃない」
「ホントよ！　ねっ、荒波君！」
荒波に救って貰おうと話題を振る。しかし荒波は。
「凄いですね、こうやって刀を作るんですか……へえー」

「……荒波君？」
荒波は真っ赤に燃える鉄を見つめていた。
「七瀬、鍛冶屋ってすばらしいな。俺、ここで働こうかな？」
「おっ、やる気があるな！　少しやってみるか？」
鍛冶屋の頭（かしら）が荒波を隣りに座らせる。
「良いんですか？　俺、荒波っていいます。」
「俺はここの頭、松原（まつばら）だ。がんばれ新入り！ガハハハハ」
「・・・・・・？？？」
もう荒波は刀を打つのに夢中で七瀬はもうちっぽけな存在となり、目に入っていない。
「ありゃりゃ、荒波は火蓮より、松原さんの方が気に入ったようだな――――――こりゃあ、しばらく帰ってこないわよ。ハハ」
七瀬は荒波に誤解されていないか気がかりでならなかった。だが今は荒波は動きそうにない。
（ならばもう一つのやるべきことを片付るわ！）
七瀬が蜃気楼に包まれる。
その状況にさすがに二人の表情も引きつる。
「わ、悪かったって、弄（もてあそ）んでごめん！」
顔の前で手を合わせるが、晴菜の謝罪も届かなかった。

◆◆

七瀬は左手なんか手当てしなきゃ良かった、と少し悔やんでいた。
何故かというと、その手当をした人間は元気になったとたん七瀬の事など眼中に入らなくなってしまったからだ。
「うおおお！　き、綺麗ですねえこの剣」
奥から楽しそうな少年の声。
「いやあ、鍛冶屋なんか初体験だよ。ティリスミナリアって楽しい

ね」
　３０分後、満足顔で鍛冶屋を出てきた荒波は、待っていた七瀬と合流した。
「じゃあ、さっさと行くわよ」
　七瀬は晴菜が戻ってこないうちに早くここを離れたかった。また面倒なことになりそうだから。
「ねえ、さっきあいつが言ってたことなんだけど……」
「ああ、晴菜さんだっけ？」
「さんは付けなくて良いわよ。で、仲が良すぎるって話してたでしょ。私は……」
「第一印象は合格できたって話だろ？」
「……へ？」
　思わず歩みを止めてしまう。
「あれ？　違うのか？　人相がどうだこうだって……」
　どうやら荒波は自己紹介から後は頭に残っていなく、二人の言葉は届いていなかったらしい。
　七瀬が待っている間に念入りに準備した、『誤解されずに誤解を解くプラン』は音を立てて崩れはてた。
「そ、そうよ……その話……良かったわね……」
　始めから違う意味で誤解してたならそのままにしとけば良かったと今更ながら後悔する。
　耳まで真っ赤になりながら激しく自分を責めたてた。
「おいおい、顔真っ赤だぞ。鍛冶屋がそんなに暑かったのか？」
　またもや誤解する鈍（にぶ）い荒波。
「静かにしてよ！　もううるさい！」
　自分で始めた話題を無理矢理断ち切る七瀬。
　結局、『瞬間移動門（テレポートゲート）』の着くまで話は交わさなかった。
「来たときと同じくこの門を使うわ、私の後に付いてきて」
「分かった、先に行ってくれ」
「転送！　城内三番目（サード）！」

七瀬の姿が消える。
「なるほど、転送する場所を言えば良いのか。便利だなあ」
門と言っても形は凱旋門（がいせんもん）に近い。
向こう側は見えていなく、金色の細かい結晶が空間を満たしていた。
荒波が中に入っても結晶にふれることはなかった。
「転送！　城内三番目（サード）！」

0-（7）決意の時

目を開けると七瀬が最上階の大きなテラスに立っていた。
「ここは、大広間かなにかか？」
瞬間移動門（テレポートゲート）を出ると、涼しい風が通りすぎる。
「そうよ。――――――ここからティリスミナリアが見えるわよ」
テラスは形は半円型で、胸までの柵が落下防止のためについていた。七瀬が手招きするため、荒波も出てみる。
「あ……おおおぉぉぉぉ！！」
地平線まで広がる森と山々、左には海も見えた。ビルなどの人工物なんかは一つも見えないその大地は、本当にここは地球なのかと考えてしまう。
そしてその大地に栄える、ティリスミナリアの街が眼下に広がっていた。せわしなく動く人達がここからは豆粒のように見える。
「綺麗だな……」
率直な感想を素直に述べる荒波。他に何も思いつかなかった。
「そうよ、ここが私たちの砦。神の手も人間の手も届かないここを、私は守ってきた……」
「七瀬……」
ティリスミナリアには人間も暮らしている。昔から怪物達と共存してきた山奥の村の人間が、神や他の人間に追われた結果、より所がここにしか無くなったのだ。
共存も出来るのにやろうとしない。人間の過ちと価値観のせいでここまで変わってしまった。
「針沢がさ、この世界は人間の価値観が作り上げたって言ってた」
「私も同感よ。ここには昔からいるけど、その考えは変わらない」
「そうか、俺も何か出来ることあるかな？　この街、いやこの世界のために何かがしたいんだ」
「大丈夫、見つかるわよ。私みたいに戦いの道を選ばなくても、他

に道はたくさんあるわ」
「助けて貰って、かくまってくれたんだ。その分は働かないとな！」
「……行く？」
「ああ、行こう」
テラスを後にして大広間を出る。二人の顔はお互いを理解できた喜びの色だった。

◆◆

「失礼します」
荒波が扉を叩くと、扉がひとりでに開く。
「入りたまえ」
長老は部屋の奥の机に座っていた。銀色の目がこちらを見る。
「唐突だが、荒波君はどうしてティリスミナリアが出来たか分かるか？」
「え？　七瀬や針沢から先祖の歴史は聞きましたけど……」
「聞いたことも入ってるかもしれんが、少し聞いてくれ」
長老は一息置いて語り出した。
「人間が現れるよりも昔から我々と神と共存しながら生きてきた。人間が現れたときも我々は彼らを見守り、火の使い方や武器の作り方を教えた。別に人間が特別だった訳ではない。他の生物にも教えたが、人間が一番頭がよかったのだ。そして人間は我らと同等の知能を持つまでに成長するようになった――――――」
「だが人間はいつからか変わってしまった。人間は我々の存在を否定し、お話の中の生き物だと言い始めたのだ。それからの人間はひどいものじゃった。森を切り払い、海を汚し、空を荒らす。それが神達の気に障ったのか、人間を排除しようと言い始めた。しかし我々は人間を信じ、忠告だけにとどめさせた――――――」
「だが、人間は豊かになるために何でもした。気がついたら我々の

居場所はなくなり、人間は地球を支配していたのだ。この別次元を妖力を駆使(くし)して探し出さなければ我々と神達は完全に絶滅していた……」

「別次元……」

「荒波君は知っておったのか？」

「ここに来たときから何かが全く違うと思っていましたから」

「わしらはここを『別次元(ディメリクス)』と呼んでいる」

「そして『別次元(ディメリクス)』に我々と神が移住してから2ヶ月後のこと。ついに人間の行いに我慢できなくなった神の軍勢が人間の都市に総攻撃を開始したんじゃ」

神の軍勢はそのとき一番栄えていたヨーロッパに進軍を開始した。人数にして数十万人規模。

そんな狂気じみた大軍を止められるのはもちろん、神と対等の能力を持つ怪物達。

人間のため、それを別次元と人間界の境目で迎え撃ったのだった神対怪物(バーサス)の戦い。

しかしこの戦いが現在の弱体化を招いてしまう。

戦いが終結するまでには三日三晩かかり、死者は人口の5分の1が大惨事となってしまう。

これが後に『赤い荒野の戦い』と呼ばれ、今もその傷は癒えることがない。本当にひどい戦いだった。

「本当にひどい戦いだったのじゃ」

すべてを話し終えた長老はいつもの褐色の良い天狗の顔ではなく、悲惨な光景を思い出す老人の顔をしていた。

「長老……」

「それからすぐのことじゃった。日本に繋がっているこの別次元に皆が安心して暮らせる場所を作ろうということになってのお、わしの指揮の下、この街が作られたと言う訳じゃ」

「じゃあ、長老は今何歳なんですか？」
「今年でちょうど３４０歳じゃ」
「そ、そうですか……」
「今や神と我々は敵対する立場。世界中に我々の基地があり、神や人間の行動を探っておると言うことじゃよ。……何か質問はあるかの？」
　質問と言われ、荒波は何か引っかかった。
（今の話……どこか、どこか分からないところが……）
「ん？　あるのかね」
「人間……、そうだ、人間だ！　今の話だと人間は俺たちに感謝しても良いはずですよね。それなのにどうして今敵対しているんですか？」
「人間には『赤い荒野の戦い』のことは分からないはずなんじゃが、情報は漏れてしまうものでな。神と我々の区別ははっきりとは付かん。しかも、噂は時を重ねるごとに変わり果てていく。その結果、５０年ほど前から人間は、ある組織を作って対抗するようになった」
「組織？　ですか……」
「身の危険を感じたんじゃろ。拳銃などで武装した大型のテロリストみたいな奴らじゃ。『人類防衛連盟』と名乗っておった」
「『人類防衛連盟』……。それに昨日襲われたんですか？」
「そう言うことになる。彼らのやり方は日を重ねることにひどくなる一方で、こちらとしてもたいへんなのじゃ。防いでくれている七瀬達にも苦労を掛けていると思っての」
「い、いえ、滅相もございません。私たちは大丈夫です」
「七瀬はなにか仕事をしているのか？」
「私の仕事は長老の片腕として、ティリスミナリアを守るために頼まれた仕事をこなしてるだけよ」
「だがのう、難しい仕事はたくさんあるのに、それをこなしてくれる人数が少ない。城の衛兵とは違って危険が高いからのう……」
　危険なところや、敵陣地への潜入まで何でもやるこの仕事はリス

クがあまりにも高いため、能力が高い人しか就けないようになっていた。
「じつはの荒波君、わしとしては荒波君のこの仕事に就いて貰いたいんじゃ……」
「長老！　荒波君には荒波君の道があります。いくら長老でもこれはさすがに……」
「無論、わしもそこは承知しておるし、最終的な判断は荒波君自身に任せる気じゃった。しかし、わしは荒波君がこの仕事に就いてくれれば、ティリスミナリアの安全に1歩前進出来ると確信しておる」
「荒波君はそんな凄い人じゃありません。荒波君一人入ったからって何も変わりませんよ！」
今のはさすがに荒波でも納得できた。
（確かに俺は役に立たないかもしれないしなあ、しょうがないよな）
荒波は自分より七瀬や針沢の方が断然強く、自分は守られる側だと、そう思っていた。少なくとも次の言葉を聞くまでは。

「荒波君は凄い人じゃよ、たぶん我々の歴史上最大級の英雄になれる。少なくともその素質は持っておる」

「……それは荒波君を買い被りすぎですよ。荒波君は、だって……」
「七瀬、言いたいことは分かる。しかしわしの人を見る目も信用して欲しい」
「しかし……」
七瀬はどうしても食い下がろうとしない。
今の七瀬には長老が何を言っても言い返せる自信があった。
荒波には入って欲しくないと強い思い、それが彼女の原動力。
だがそこに口を挟まなければいけないと考える者がいた。
「もう、いいよ七瀬……」
荒波万だった。
「俺はその仕事がしたい。俺にどんな力があるかまだ分からないけ

ど……ティリスミナリアを守れるならやりたい！」
「本気なの？」
「冗談なんかいわない。俺はこの街を、世界を、守りたいんだ……」
長老を見る荒波の顔。これを人は真顔（まがお）とは呼ばない。
真剣な顔。
もう批判も反対も出なかった。
男の決意、それはどんな物より重い物。
「ありがとう……荒波君」
長老の目はすべてを見透（す）かしていた。

◆◆

「失礼しました」
２人が部屋を出ると長老は窓際に寄る。下にはつい先ほど彼が守ると言った街が変わらず広がっていた。
パイプに火を付け、一気に吸い込む。
長い鼻の先からモクモクと煙を上げる。
「もっと説得に時間が掛かると思ったんじゃがのう……」
こんなに早く承諾するとは思いも寄らなかった。
「大きくて、良い子どもだぞ都牟刈（つむがり）……１５年前に言った通りじゃ」
長老が最後に都牟刈（つむがり）を見たのは１５年前。
これから生まれる子どものことで長老を訪ねてきていた。

――――――俺にもうすぐ子どもが出来る。人間との子なんだ。
――――――都牟刈。人間は嫌いではなかったのか？
――――――大丈夫、とてもすてきな人なんだ。生まれてくる子供も俺の全てを受け継いでくれる。絶対だ……。だからさ長老、ここに息子が来たらその時は……

「おまえが言った意味、今なら分かる気がするぞ」
長老はパイプを大事そうになでる。パイプの臭いも15年前と同じだった。
「本当にそっくりじゃ」

0-（8）選んだ道

長　針沢は暗い廃ビルの階段の踊り場に身を隠していた。
「たくっ、誰だか知んないがヘマしやがって。こっちの身にもなってみろってんだ――――――――はあぁ」
今回の針沢の依頼（ミッション）は、『人類防衛連盟』に奪われたこちらの新型の槍の情報が入ったメモリーチップを奪還（だっかん）又は破壊（はかい）しろという物だった。
先ほどメモリーチップは解読される前に破壊したが、脱出が難しい状況になっていた。
階段下では今も針沢を探す兵隊の音が聞こえてくる。
「さて、どうしたものか……」
下の入り口はもう固められていた。そしてこのビルに窓はない。
針沢に残された道はただ一つ。
「！？」
階段を上がってくる音がして、針沢は拳銃を身構える。
（足音からして人数は2、武装はそんなに重くなさそうだな）
聴覚から入ってくる最大限の情報を元に、これからの行動を組み立てる。
兵隊は踊り場にはいる直前まで来ていた。針沢とはコンクリート1枚を挟んでいだけ。
今しかない、そう思い針沢は反撃に出た。
開いた左腕で空になった弾倉（マガジン）を投げる。
静だったビルの中に軽い金属音が響いた。兵隊は二人同時にその場所に振り向く。
それを待っていた針沢はコンクリートの陰から飛び出し、『一S&W（スミス&ウェッソン）M19』の引き金（トリガー）を引く。
リボルバー特有の音と共に標的に着弾。声を上げる隙も与えない。
倒れるのは2人同時だった。だが――――――

ガンガンバキバキと、派手に来た道、つまり階段を落ちていく。
（もっと静かに落ちろよ！）
だが既に時遅く、針沢の耳元を7．62ミリ弾がかすめる。
のろのろしている暇はなかった。拳銃を持った兵隊がどんどん針沢の後を追って階段を上ってくる。
相手に背中を見せないように階段を上るという、苦戦を強いられた針沢。
少なくとも6つの銃口が針沢に風穴を開けようと狙っていた。
しかし針沢の運動能力もバカに出来ない。獣のようなスピードで兵隊からどんどん距離を離していく。
さらに――――――――
「ぐはっ！」
「どあ！」
前にいた兵隊達が一気にやられる。
「なんだ？」
後ろの兵隊は目の前で何が起きたのか理解できないでいた。
それもそのはず。銃声はしなかったし、針沢は1つ上の階にいた。
バシュ。
今度は一番後ろの兵がやられた。
方向は関係なかった。
無差別にやられていく兵達。
「ど、どこから？　――――――――ぐあ！」
一人の兵は自分の脇腹に刺さった物を抜いた。
（針？　だと……）
「だあああ！、あいつだ。上にいるあいつをぶち殺せ！」
誰かが叫んだ。
「うおおおお！！」
残った兵達は階段を駆け上る。
兵達の頭には針沢を殺すことしか考えられなかった。
だが、針沢にとって頭に血が上っている兵隊は、軽くあしらえる

ほどの存在になっていた。
前列の兵士が足下のワイヤーに触れる……。
最上階で手榴弾の爆発音を聞いた針沢はもう振り返らない。
「戦場で大切なことは、冷静さを失わないこと……」
たとえどんなに相手を倒したいという気持ちが強くても、冷静さを失ったら意味がない。
失ったら最後、あんな簡単な罠でも引っかかってしまう。
手榴弾の安全ピンにワイヤーを繋いで簡易の罠にする。仕掛けるのには1分もいらない優れものだった。
針沢は扉を開けて屋上に出る。外は雨が降っていた。
この廃ビルはティリスミナリアがある『別次元(ディメリクス)』ではなく、人間界にある。
人間は『別次元(ディメリクス)』に行くことは出来ない。そのため『人類防衛連盟』の基地は人間界にしかなかった。
(迎えはたぶん来ないし帰るか……やること片付けたらな)
屋上に続く扉の向こうに5人の生き残りがいた。
(すぐ襲ってこないということは警戒してるのか。少しは学んだらしいな)
隙を見せたら襲ってくるため、先手を取る。
手の平に現れる5本の針。
「我(われ)が作りし聖なる針――――――――」
針が浮き上がる。
「――――――――果てなく敵を追い、その肉を刺せ!――――――――」
針沢の中の妖力を集中させ、針を制御する。
どこまでも標的を追いかけ、その血を見るまで止まることはない。
その名は――――――――『北欧の魔剣(ダーインスレイヴ)』
針沢から解き放たれた針達は弧を描くように扉のすきまに入り、

相手の肉を貫く。
扉の奥からは銃声と小さな悲鳴が鳴り響いた。
針沢は物音がしなくなったのを確認する。その顔に表情は見られない。
「依頼（ミッション）、終了だ……」
フェンスを乗り越え、姿を消す。
雨はいつのまにかやんでいた。

◆◆

長老室を後にした2人は大広間のテラスに戻ってきていた。
時刻は夕暮れ時。ティリスミナリア城の白い壁は仄かなオレンジ色に染まっていた。
「ねえ、どうして急に入る気になったの？」
七瀬は長老室からずっと思っていた疑問を口にする。
「俺はさ、昨日七瀬が助けに来てくれてうれしかった」
「え！？　――――――――っ！」
荒波の言葉に思わずドキンと来てしまう。
「――――――――ずっと守ってもらえる側だと思ってた……。ここで何かを売ったり作ったりしながらも七瀬や針沢を支えてさ、それで一生を終えるんだと思ってたんだ」
「でも長老に言われて分かった。俺にはティリスミナリアを守るだけの力が備わってる、自分がそう言ってる……だから守るって決めたんだよ」
「やらないって道は無かったの？　この道意外にも選択肢はあったじゃない！」
「俺はさ……出来る立場いるのにやらないっていうのは嫌いなんだ。やりたいのにやれない人もいるんだ……。そんな人のことを思うと、

このまま逃げるわけにはいかない」
七瀬は恥ずかしくて俯いてしまった。
荒波を庇って一番良い人生に導こうと思っていたのに、それは彼を邪魔しているに過ぎなかったのだ。
「七瀬の気持ちもうれしいよ」
荒波は七瀬の気持ちを察したかのように話しかける。
「でも俺はこの道を選んだ。七瀬と一緒にこの世界を救う。――――こんな道でも良いだろ？」
荒波は前を向いたまま問いかける。
「……うん」
その目はもう迷っていなかった。
希望は後ろにはない。前を向いて歩き出す。
荒波の胸に赤い灯火（ともしび）が灯った瞬間だった。
そして、七瀬の胸にも熱く大きなものがこみ上げて来た。
それが何だかは、まだ本人は分かっていない……。

0-（8）選んだ道（後書き）

序章が終了しました！

活動報告も出しましたんで、そちらもご覧下さい。

これからも執筆がんばりたいと思います。

1-（1）二週間の時を経て

～４月３０日～

バン！

銃声がコンクリートで固められた四角い空間に響いた。

荒波の左肩に軽い衝撃が掛かる。

銃口から発射された弾丸が２５メートルの道のりを駆け抜け的（まと）に次々と命中していった。

当たった的は潔く倒れ、別の場所から違う的が上がる。

「ふうー」

荒波はこった首を回して息を吐いた。

７発目を打ち終わった荒波は安全装置を掛け、モニターを確認する。

「心臓に当たったのは４発、まあまあか……」

荒波が数えていたのは人型の的（まと）に弾がいくつ当たったか、ということ。

ここ、ティリスミナリアに来てから既に二週間。荒波は射撃演習場に毎日のように通ってきていた。

「どうだ？　『ワルサーＰＰＫ』の使い心地」

奥で荒波を見ていた人物が近づいてくる。

この射撃演習場とその上にある銃専門店『ウインドホール』のオーナー――――――――サングラスが特徴の都倉（とくら）。

オーナーと言っても荒波より２つ上なだけだなので、だいたいはため口で接していた。

「悪くないけど、軽いし……なんか小さい」

正直に銃の感想を述べると都倉は残念そうな顔をする。

「おまえは体に取り込んでしまえるけど、俺らみたいな人間はコンパクトにしたほうがしまいやすいんだよ」

「そんなこと分かってるよ、俺も二週間前まで人間だったからな……」
「でもなあ、来たばっかの新人がＴＳＯにいきなり入隊とか俺初めて聞いたぞ」
ＴＳＯとは二週間前に荒波が所属したチームの略称だ。
正式名称『Ｔｅｌｙｓｍｉｎａｒｉａ　ｓｐｅｃｉａｌ　ｏｒｇａｎｉｚｅ　ａｒｍｙ』。意味はティリスミナリア特別編成軍。
長老やそのほかの大臣らから受けた依頼をこなし、主に人間と神相手に戦闘を行うチーム。
？軍？と付いているがだいたいは二人から四人ほどで仕事を行う。
中には依頼を絶対に一人でこなす『１人だけの軍（ワンマンアーミー）』もいるらしい。
「訓練場には行かなくて良いのか？　毎日毎日俺の店に来てるけど」
「来なくて良い、って言われた」
「はあ！？　何したんだ荒波！」
「違うよ、剣術がうますぎて訓練は必要ないってこと」
「なんだそりゃ？」
別に荒波がナルシストになったわけではない。その通りだった。
訓練所で剣を握った瞬間、懐かしい物がこみ上げてくるような感触がして、教官の剣捌きを見る度（たび）に思い出すように剣術が頭に浮かんできたのだ。
５日前に訓練所で行われた模擬剣術戦闘では片手一本で余裕で優勝してしまい、教官を本気で驚かせてしまった。
しかしその戦い方を見れば誰でもそう思うだろう。
荒波の戦い方は剣を相手と交差することがほとんど無いからだ。
荒波は切り込んでくる訓練生を華麗に避け、隙が出来たところで剣を振るう。
しかもそれが１週間あまりでできたのだから、驚くなと言う方が無理がある。
最速５秒で相手を降参（リザイン）に持ち込むその腕前は、一夜にしてティリスミナリア中に広がった。

と、いうわけでもう荒波は剣術より拳銃を優先させたいという気持ちになっていたのだった。
「と、まあそういう訳。分かった？」
都倉に訓練所でのことを話すと納得してくれた。
「それで七瀬とはうまくやってんのか？」
「うまくって、別にケンカなんかしてないけど」
「ああ……なんだ進展なしかよ」
「なんの話してるんだ？」
「そんなことより荒波、おまえ何で左手で拳銃撃つんだ？　利き手は右だろ」
「ああ、このこと？　これは右手で剣を握るためだ」
「はあ？　おまえ、右手に剣で左手に拳銃ってか？　そんなんで戦えないだろう」
剣と銃。その発想は歴史上で見ても何人も思いついてることだろう。
しかし実行する者は少ない、というかまずいない。
理由の大きな部分は間合いが全く違うからだろう。
剣の間合いはせいぜい２～３メートル。それに比べ拳銃の有効射程距離は５０～１００メートル。
攻撃方法が全く違う武器をどうやって使うのだろうか、と都倉は考える。
「なあ、ホントに出来るのか？　まあ確かに針沢は針と拳銃を使ってるけど、アレは間合いが変わらないからであって……というか弾倉（マガジン）はどうやって入れ替えるんだよ！」
「大丈夫だ、出来るって！」
余裕の笑みで自信満々に宣言した。
いったいこの自信がどこからくるのか？　都倉は全く分からなかった。
「じゃあ、次の拳銃行くか！」
つまり別の拳銃貸せと言っているのだ。

「もう、４０丁は試したじゃないか　その中に良いのはなかったのか？」
「一つあった。でももうちょっとバリエーションが欲しいんだ」
「注文がうるさい客だなあ、ったく！」
そうは言いながらも、代わりの拳銃を持ってくる。
「これはどうだ？　１９６９年発売の『ワルサーＰＰＫ／Ｓ』に自作の『消音器（サイレンサー）』を取り付けた自慢の１品だ！　どうだ？」
美味しい料理紹介のようにスラスラ自慢する。
どうだ？　の言葉で「へっへっへ、自作だぞ！　俺が作ったんだ！」という言葉を込める都倉。が……
「いや、『消音器（サイレンサー）』とか、余計な物いらない」

ガーン！
都倉は崩れ落ちた。レフェリーがカウントを始める。
（ま、まさか俺が作った超凄い消音器（サイレンサー）が否定されるとはあああぁぁぁ……）
「な、何故だぁ。そこらの消音器（サイレンサー）よりも音も光も漏れないこの自信作が……」
「いや、弾丸が引っかかって威力が弱まるから俺は消音器（サイレンサー）好きじゃないだ」
「そこは俺が工夫してやるから！」
「とにかくいらない！」
ガビーン！
（最後は理屈なし……）
都倉はもう立てない。ゴングが鳴った。
（ま、負けた……）
勝者、荒波？

◆◆

別次元（ディメリクス）は地球と同じく昼夜が２４時間で巡ってくる。二つの次元が隣り合うように接しているので面積も地球と同じだ。

なので生活リズムを変えることはなく、食事も1日3回ある。

射撃練習場を後にし、今日も軽く昼食を済ませた荒波はお日様の下を歩いていた。

荒波は一旦噴水の袂（たもと）に座る。

ここは城下町６番地区。荒波が初めてティリスミナリアに来たときの瞬間移動門（テレポートゲート）は右側にあった。

二週間前、荒波は変わった。

ＴＳＯに入隊することになったその夜から、自主的に走り込みやジャンプの練習をし、射撃演習場にも毎日通った。訓練場も追い出されたが、針沢に「そこら辺の人間や神の血縁（ゴッドブラッド）には負けないな！」と言われるまで、剣術は上達していた。

今となっては七瀬や針沢と同じ強さとして捉えられるまでに成長しているはずだった……が。

「うーん……」

荒波は悩みが絶えなかった。

剣と銃で戦う。

その実現には自分に合った武器が必要だった。

ビュンと音がして、荒波が1つの拳銃を実体化させる。

『ガバメント９？カスタム』。コルト・ガバメント、つまり『コルトＭ１９１１』をベースに都倉がカスタムした銃。ダブルアクションになっていて、初段のコッキングさえ行えば続けて弾丸を発射可能だ。

装弾数は少ないが、アメリカで同じ拳銃をよく使っていたせいか一番しっくり来た。

さて、問題はもう一つ武器、剣の方だった。

荒波の理想としては片手持ちの長剣（ロングソード）が良かったが、まだ自分にあった物が見つかってない。
既に武器屋はいくつか周り、七瀬と一緒に城の武器庫までチェックを済ませてあった。
だが、使いやすいものは何個か合った物のなんだか体が拒否するようでうまく使えなかい。
模擬剣術戦闘の時の剣もしっくり来なかったが、七瀬には「しっくり来ない！？　じゃあ模擬戦闘の時は本気が出せなかったの！？　そんな贅沢言ったら負けた人達が黙ってないわよ」と怒られてしまったため、今日は一人で探すハメになっている。
（あとどこかに武器屋あったかな？）
座っててもお始まらないと思い、６番地区の大通りを歩き出した。

1-（2）愛剣との出逢い（前書き）

1-（2）愛剣との出逢い

ティリスミナリア町の中で店が集結しているのは5、6、11、12番地区。これらの地区はいつ来ても人の姿が絶えない、活気のあるところだ。

そのほかの地区にも店はあるが、武器屋や防具屋、宿屋なんかはここらじゃないと見掛けなかった。

（針沢にでも電話するか）

相談したら良いこと教えてくれるかも？　と思い携帯を取り出すがそのとき、聞き覚えのある声が精肉店から聞こえてきた。

「ちょっと、5番地区では豚バラ肉もっと安いわよ！　２００円負けなさいよ！」

指を二本立てて、値切りの構えをする晴菜だった。

おまえは大阪のばあちゃんか？　と思いつつ荒波は声を掛ける。

「よお、晴菜。値切ってんのか？」

「あれ？　荒波じゃん。こんなとこで逢うなんて奇遇だねえ」

顔はこちらを振り向いているが、精肉店の兄ちゃんには指を見せつけたまま引き下がらない。

「ねえ、聞いてよ！　この肉屋が……！」

急に話をやめ、なにかを思いついたかと思うと、

「この人、模擬剣術戦闘の決勝戦の相手を1分で倒したんだ☆　知ってるでしょ？」

「な！？　――――――っ」

いきなりの紹介の仕方に一瞬言葉を失う。

（まさか……脅す気か！？）

自分の名誉のため、思いっきり晴菜を睨む。

「おい、おまえ！　……あ」

だが、思わぬところにまで被害が出た。

荒波の睨んだ先――――――晴菜の延長線上には平和を愛する肉

屋の兄ちゃんが立っていた。そして……
「……負けさせて頂きます！」
兄ちゃんは超ビビった様子で肉を包み始めてしまった。
（俺は全く敵意が無いんだけど……）
「あ、あの……」
「は、はい！では３００円負け――――――」
「いや、そういうわけでは……」
このあとも会話が成り立つことはなかった。

◆◆

「俺を脅しに使うな！！」
精肉店に声が届かない距離まで移動した荒波はずっと言いたかったことを口にする。
本当はあのお兄さんにも謝りたかったのだが、精一杯の営業スマイルで見送ってくれるのを見てしまったため何も言えなかった。
「いやあ、荒波の噂はこんなところまで来ているのか。ホント凄いねえ」
「おい、人の話を聞け。あの兄ちゃん怖がってたろ！」
「荒波の睨みのせいじゃん」
日頃顔が女っぽいと言われ嫌がっていたが、睨んで怖がられる顔もいい気はしない。
「晴菜が俺の第一印象を勝手に決めたんだろうが！　商店街中に噂されたらどうするんだよ！」
「大丈夫よ。私の夕食は確保できたから。」
「おまえに夕食なんか聞いてねえええ！！」
「私の得意料理は――――――」
「わざとだろおおおお！！」

（よし、ちょっと落ち着こう。こんなに『！マーク』ばっかり使ってたら脳の血管がぶち切れる）
「今日は買い物？」
話題を変える荒波。
「ん？　ああそんな感じ」
「荒波君は剣や銃のことばっかりって火蓮が怒ってたよ」
「なんだ知ってたのか……七瀬に謝っといてくれる？」
「自分でやりなさい、七瀬はきっと……やっぱ何でもない！」
（今は七瀬の気持ちは教えない方が良いわね、鈍感で助かったわあ）
余計なことを言ったら燃やされるような気がして、晴菜は少し安心していた。
「あのさ晴菜、この辺に武器屋ない？　知ってると思うけど長剣（ロングソード）が必要なんだよ」
「私は良いけど……怒らない？」
「誰が？」
即答。
本当に分からないらしい。少しは気に掛けろと言わんばかりの顔も荒波には通じなかった。
「すぐ近くの武器屋に新商品が入荷したらしいわよ。知らなかった？」
「すぐ近くって、5番地区のか？」
「は？　ホントにすぐ近くにあるじゃない！」
「すぐ近くう？」
付いてこいと手を引かれたのでしぶしぶついて行ってみる。荒波が通ってきた道を逆戻りしてるようだった。
しばらくすると座り込んでいた噴水が見えてきた。
裏道でもあるのかと思ったら、晴菜はよく知っている店の前で足を止めた。
「ここよ」
「はあ！？　『ミーハン』じゃん！」

『ミーハン』というのは荒波がティリスミナリアに来た初日に訪れた鍛冶屋だった。ここの頭、松原さんにひどく気に入られた荒波はたまに顔を出していたが。
「って、確かにここでは長剣（ロングソード）は作ってるかも知れないけど売ってないだろ」
「まあ、確かに鍛冶屋の方が目立ってるけど……」
また晴菜が手招きをするため右隣の路地に入る。
路地には小さい出店が出ていたが、『ミーハン』の建物からも看板が出ていた。そこには……
「武器屋ミーハン！？　ここ武器屋もやってるのか？」
「ガハハハ！　知らなかったのか荒波。うちは武器屋もやってるんだ！」
店から出てきたのは、いつも工房でハンマーを持っている松原だった。今日は店番なのかいつもとは服装が違う。
「松原さん！　教えてくれても良かったじゃないですか！」
「いやあ、分かってると思ってたよ。せっかく来たんだから商品見てけよ」
荒波は松原の大柄な腕で店内へと連れ込まれた。
店内に入ってみると、意外と広い上従業員もたくさんいた。
品揃えも豊富で、荒波が行った他の地区の武器屋より多かった。
「俺はここの店長もしてるってわけだ。ガハハハ！！」
「じゃあ、遠慮無く見させていただきます」
「ゆっくりしてけよ！」
笑顔が絶えない松原は笑いながら店の奥に入っていった。
荒波は様々な剣を手に取り、刃を見たり振ったりしてみた。
「うっわ、何これ？　どうやって使うのよ？」
いつ入ってきたのか晴菜が荒波のすぐ横で新入荷の棚を見ていた。
自分と共に戦う相棒を捜している荒波にとっては結構邪魔に感じたのだった。
「ジャマダ……」

「え？　ちょっとここまで連れてきたのに邪魔はないでしょ！」
「だから、それはジャマダハルっていう剣の一種だ」
「……ジャ、ジャマダハル？」
「そう、主に北インドで使われていた物で別名ブンディ・ダガー。切ることより刺すことを意識した作りになってる。また――――――」
荒波は自分の長剣（ロングソード）をチェックしながらも機械のようにスラスラと説明していく。文章そのものを暗記しているかのようだった。
「ふむふむ、凄いわねえ。そこまで説明してくれると質問も何もないわよ。荒波って頭良いじゃん」
荒波としては説明すれば少し静にしてくれるかな？　程度だったが、予想以上に晴菜に褒めてもらえた。
「そんな知識どこで覚えたの？　ここに来てまだ二週間でしょ？」
「来る前だよ。3年前にテレビで紹介してたのをそのまま言っただけで全然凄くないよ」
「3年前？　それを一字一句間違わずに何で覚えてられるのよ」
「……何でだろ？　考えたこともなかった」
「なるほど、あの子が惹かれる訳だ」
「松原さん、ここにあるので在庫全部？」
案の定、また荒波は聞いてなかった。
「荒波！　良い物がある。ちょっと来い」
松原が店の奥から顔を出す。
「あ、はい！」
荒波は松原について行って店の奥に姿を消した。

◆◆

店の奥は鍛冶場と繋がっていた。

若い人達が金属を打っているいつもどうりの光景がそこにはあった。
松原はそこの端の襖を開ける。
「荒波、おまえは長剣（ロングソード）が欲しいんだろ？　さっき俺が仕上げたばっかりのが奥にある」
松原に示された方を見る。
畳の奥、木の飾り棚の上に一振りの剣（つるぎ）が掛けられていた。
「これは？」
「分類は長剣（ロングソード）。銘は――――――『アイテール・シエル』」

1-（3）アイテール・シエル（前書き）

今回は少し長めに書きました。

試験が近いため、今週からテスト勉強を始めるため、二週間から三週間ほど投稿できなくなります。

この小説をご愛読の方には迷惑をおかけしますが、ご理解をお願いします。

1-（3）アイテール・シエル

『アイテール・シエル』。

荒波は右手を伸ばし、柄を手に取る。

長さは８０センチほどの銀色の剣（つるぎ）。肉厚の刃からは戸から差し込んだ光がその輝きを失わずに反射される。

握っただけでかなりの代物だと分かった。

刃の厚さに伴って重さも尋常じゃない。片手用にしては重量がある。普通の人間ならまず、持ち上げることは不可能だろう。

長剣（ロングソード）というと洋風の剣を思わせるが、この剣は刃の下のダイヤ以外目立つ装飾が無く、まるで日本刀のような美しさを放つ。

「良い、剣だな……」

荒波は簡潔に、しかし力を込めて感想を語った。

松原も得意げになる。

荒波の左手が、ゆっくりと刃を撫でた。

「！？」

平らで磨かれたはずの刃から、ざらざらという感触が伝わってきたのだ。

荒波が『アイテール・シエル』を裏返すと、刃の中間当たりに稲妻形の印が判子（はんこ）を押したように付いていた。

剣全体は銀色なのにその稲妻の周りだけが黒くなり、荒波には装飾としては合っていないように見える。

体は――――――拒否しなかった。

「松原さん、この剣は？」

「この剣は半年前に『別次元（ディメリクス）』上でいう中東の村で見つかったんだ。村は火事かなんかで焼けていて人はいなかったそうだから、俺らの仲間が使える物だけ持ってきた。その中にその剣があったんだよ……」

荒波は剣の刃を弾く。

キーンと澄んだ音は耳の奥に響き、何か叫んでいるようにも感じる。
「その剣を俺が鍛え直したんだ。元々妖術が掛かってたみたいなんだがほとんど失われていてな、俺が自作の妖術を掛けて鍛えたんだ」
「松原さん……」
「ん？」
荒波は『アイテール・シエル』から視線を上げ、松原の目を見ながら言った。
「ありがとう、松原さん。この剣、大切に使わせて貰うよ」
「ガハハハ、気にするな荒波。ちなみにお代は無料（ただ）だ！」
「え！？　ただで良いんですか？」
さっきまでの感動に驚きと喜びが混ざって頭がいっぱいだった。
このときにはもう稲妻のことなど気にもとめていなかった。
「そのかわりまた遊びに来いよ！」

◆◆

7番地区は自然が豊かなところだった。
山と森、そして川が流れる自然に溢れたこの区画は街とは違う空気だ。
荒波は『アイテール・シエル』を振り下ろす。
ズバン！
目の前の岩が大きな音を立てて真っ二つになる。
だが右手に握られた剣――――――『アイテール・シエル』には傷一つ付かなかった。
「……凄いな、どんな妖力を使ったんだか？」
刃をまじまじと見つめ、やはり何度か撫でてみる。

荒波たちや神が使う近接武器や弓矢にはたいていの場合妖術が掛かっていて、切れ味や耐久度、軽さなどを強化している。そうでもしないと刃が欠けたり、曲がったりして戦いにならないからだ。
１９世紀頃から妖力の存在、利用方法を考え始めたころはまだ神と怪物は仲が良く、当時の開発目的も取り締まりや見せ物程度の目的でしかなかった。
それが今は戦争に使われて、毎日たくさんの人を殺している。
妖術が掛かった武器は自分の能力を上乗せしたりも出来るため、この世界のほとんどの人達が妖力武器を愛用していた。
しかし、それは単純な構造のものに限られ、拳銃なんかは強化できないという欠点がある。
そのため、人間の兵器はほとんど好まれなく、都倉のウインドホールに閑古鳥が鳴いているのもそのためだ。
荒波は何度も『アイテール・シエル』の感触を確かめ、自分の体術と組み合わせる。
突き、屈(かが)み、切る。その一連の動作を繰り返し、体に覚えさせるのていた。
「いたいた、探したわよ」
上から晴菜が現れた。
「ん？　どうした？」
「はいその剣の鞘(さや)！　松原さんが渡してくって」
あのあと松原が見繕(みつくろ)った物だった。
「鞘って、気持ちはうれしいけど体内にしまうんだから必要なくないか？」
「大会の時とかに意外に使うの！　持っておきな」
早く面倒な役を終わらせたいようで、返事も聞かずに鞘を放ってきた。
「ありがと」
『アイテール・シエル』の大きさにぴったりで、意外に重宝しそうだった。

「じゃあ、私はこれで……」
「ちょっと待て、聞きたいことがある」
そう言い、晴菜の袖を掴む。グッと引っ張られ転びそうになった。
「へ……！？　いや、何で……？」
「晴菜もＴＳＯなんだろ？　どういう仕事してるんだか気になってさ」
「え！？　あたしの仕事なんか気にしてどうするのよ？」
「まだ俺仕事したことないからさ、参考にしたいと思って」
やって欲しい仕事が出来たら教える、と長老に言われたが給料だけ貰って何もしてないというのはさすがに気にしてしまう。
「あたしは基本的に何でもやるわよ。捜索や潜入、戦闘もちゃんとこなしてるわ――――――ＴＳＯの人達は基本的に自分に出来る範囲の仕事をしているの。ただ、何の仕事もできる人の方が当然給料は高いわよ」
「へえ……俺は何が得意なんだ？」
「たぶんあたしや火蓮、針沢とかと一緒に活動するんじゃない？」
「え？　それって……」
「頼まれたことはすべてやるの！　分かった？」
「……ああ。」
「じゃあ、今度はこっちから質問するわ」
「良いけど……」
「荒波って女の子とふれ合ったことある？」
「……若干危ない質問をどうして真顔で聞けるんだ？」
荒波は１歩ずつ後ろに下がる。
「ちょ、何引いてるのよ！」
「無いよ！！　学校ではほとんど話したこともない」
「そう、なら安心ね」
「頼むから質問の意味を教えてくれ」
「個人的な興味」
「おまえを若干どころか超危ない人だと認めるよ……」

「認めないで」
お互い全く分かっていなかった。
「じゃあ、戦闘訓練を続けたら？」
「そうだな、晴菜も一緒にやるか？」
「まあ、良いけど……怒らない？」
「俺は良いって言ってるじゃん」
頭を抱える晴菜。本当に鈍感だった。
（あんまり2人きりでいると燃やされそうなのに……）
だが、長い髪に隠れた荒波の目元なんかを見ていると心が揺らぐ。女の子っぽいわけでもないが男らしい訳でもない。そんな絶妙なかっこよさに惹かれてしまう。
「ちょっとだけよ」
両手に短刀を実体化させる。晴菜が使う『ダカエネシ・ベンテゥス』だ。
「少し下がってて」
両脇に短剣を構えと、晴菜を中心に空気の渦が集まり回り出す。
荒波の長い髪も大きく横に靡（なび）いた。
「はあ！」
ビュン！
黄色い竜巻が空気を切り裂く。
中心の晴菜が手を動かすたび、周りの草が削り取られた。
晴菜は誰よりも鋭く、素早く敵を切ることが出来る。
荒波が聞いた話では、敵はいつ切られたのか分からないほど素早いらしい。
その話は、昔聞いたある妖怪と似ていた。
「さすが、鎌鼬（かまいたち）だな」
素早い動きは関心するほど美しかった。決まった軌道を狂いなく動く剣先は大きく弧を描く。
周りの草を刈り取っていく晴菜は次の目標を定めた。
キン！

二つの刃がぶつかり合う。
「……何だよ！　試したのか？」
荒波が『アイテール・シエル』で晴菜の『ダカエネシ・ベンテゥス』を受け止めた音だった。
晴菜は受け止めたことが分かると、すぐさま剣を下ろした。
「へえ、よく反応できたわね」
「油断してたわけじゃないからな」
荒波は剣を下ろし、収納させる。
「それは、双鈎（そうこう）か？」
「まあ、近いわ。であたしの『ダカエネシ・ベンテゥス』は、形的に短刀かもね」
晴菜に右の双鈎を渡される。
左右対称の『ダカエネシ・ベンテゥス』は黄色を基調としていた。
刃は控えめ程度に光を放ち、柄の部分が黄色の紐で装飾してあった。
「軽いな、威力あるのか？」
「あたしは早さ重視だから。威力は重さと使いやすさの次なの――――じゃ、あなたの技も見せてよ！」
「オッケー、しっかり見とけよ！」

◆◆

「ねえ、綾ちゃ～ん。僕と一緒に――――――」
「・・・・・・」
晴菜は頭を抱えていた。
訓練を始めてから約１５分。いきなりこの男が森の中から乱入してきたのだ。
「だからこんな男とじゃなくて僕と――――――」

頭の上に？マーク満載の荒波はただ見てるしかなかった。
晴菜に寄り添おうとする男と、避け続ける晴菜。
誰なのか聞いてみたもの「萩元……変態のストーカー」としか答えてくれなかった。
（顔と口調からして変質者？　いや、でも友達だからこんな馴れ馴れしいのかも？）
荒波が人のことをよく心配するようになったのもティリスミナリアに来てからのことだ。
「なあ、晴菜。そ、」
晴菜に話すのを強制的に禁止された――――――というか晴菜に手で口を塞がれた。
「あたしはこれから荒波と仕事に行くの！　付いてこないでね！」
「んん――――――っ」
はあああああ？　と言うつもりだったが当然、口は動かない。
いきなり晴菜の茶番には付き合えない荒波。
「そんな男より、僕と行きましょうよ～」
「気持ち悪い、来ないで！」
それは荒波も同感できた。
「そんな！　このルックスのどこが気に入らないんですか？」
荒波としては藤本のルックスは悪くはないが、変に格好つけて髪型や服装を工夫しているところがなんだかキザに見える。
「全部！」
（全面否定ですか！？）
手厳しいというか、全く接する気がない晴菜。必要以上に荒波を引き寄せる。
「じゃあ、僕がエスコートしますよ！」
「どこで？じゃあ？に繋がってるの？　あたしは荒波と仕事に行くって行ったでしょ」
一応荒波も頷く。ここで帰って貰いたかった。だが……
「こんな奴に頼るより、僕の優秀な頭脳と鍛え上げられた体のほう

が役に立ちますよ。僕は貴方が好きなんです。さあ、行きましょう！」
帰れば良かったものの、懲りずに手を差し出す。
気持ちをアピールしているつもりだろうが、聞き慣れた晴菜には届かなかった。
晴菜も拳を握りしめて怒りをこらえている。相当頭にきたようだった。
「じゃあ、私の命に関わるから言うけどね――――――」
今までの鬱憤をすべて込めるように一言。
「あなたは自分の乗るスペースシャトルの操縦を、ゴキブリに任せられるの？」

「・・・・・・」
時が止まった。
荒波は口を塞がれたまま、時を止めた張本人は勝ち誇ったように。
そして藤本は――――――白くなっていた。
「あ、が、がが、ぐう……」
首をかくかくしながら理解不能の言語を漏らす萩元。
よっぽどショックだったのだろう。口から何かが出ていった。
「おい、言い過ぎじゃないか？」
やっと変な時間軸から解放された荒波は萩元に助け船を出そうとする。
「ふっ、すばらしい殺菌効果ね！　あはははは！」
「……何？　雑菌だったの？」
よっぽど今までが嫌だったのか感激&気分爽快の顔をしている。
「……哀れだ」
もう萩元はしゃがみ込んで丸くなってひくひくしている。
「なんかしゃくり上げてるけど……」
「良いきっかけで早く立ち直って欲しいわね」

「誰が原因だよ……ん？」
荒波はズボンから携帯が着信していることに気づく。
「もしもし？」
相手は針沢上彦だった。
電話口からは前置き無しのたった一言。
『仕事だ荒波……』
「ああ、分かった……」
『場所は荒波と俺が初めてあった場所。１０分後だ』
「いや、５分で行く」
通話終了ボタンを押して携帯を素早く仕舞い、『ガバメント９？カスタム』の弾丸を確認する。
「おまえも凄い勘だな。本当に仕事が来たぞ」
「山勘よ、ホントは荒波とが良かったんだけどね」
「え？」
「冗談よ。がんばってね初陣（ういじん）」
首を少し傾け、ニコッと笑って荒波を送り出す姿は女の子気（け）が見えた。
「ありがと。じゃ、行ってくるよ」
荒波は瞬間移動門（テレポートゲート）の方に走っていった。
その姿は二週間で勇ましく成長を遂げている。
「何でかなあ？　構いたくなっちゃうんだよな」
荒波の笑顔を思い出し少し笑う。
晴菜はその場に雑菌１匹を残して、立ち去った。

1-（4） 進入（前書き）

二週間と言いながら二ヶ月空けてしまいました！

すみませんでした。

1-（4） 進入

瞬間移動門（テレポートゲート）を出ると針沢が待っていた。
「早かったな」
「まあな、装備はほとんど持ってたから――――――ってその脇にあるものはまさか！」
「お！　分かるか？　荒波のバイクだ」
「おお、生き返ったか！」
久し振りの相棒との再会に感激する荒波。
二週間目の襲撃でタイヤはパンクしてエンジンは弾丸が突っ込んで動かなくなっていはずだが、目の前の青いバイクはピカピカの新車みたいだった。
だめになったパーツは取り替えてくれたらしい。
「城の支援部隊が精魂込めて直してくれたんだ。前より性能良いかもしれないぞ」
針沢は悪戯（いたずら）っぽい顔で笑いながらバイクを撫でる。
「今度お礼言わなきゃ」
「紹介してやるよ、この仕事が片付いたらな」
「ああ、頼むよ」
「目的と詳細を説明する。今日は人防（人類防衛連盟の略称）相手だ」
針沢はポーチから薄いケースを取り出した。丁度、端から白い物がはみ出していたので、荒波は何かの用紙かと思った。
「まず場所なんだが――――――」
針沢がケースから取り出したのは地図――――――ではなかった。
「あ、ｉｐａｄかよ！」
「なんだ？　欲しいのか？」
「いや、雰囲気的にここは地図が出てくるのかと……」
ｉｐａｄは今の人間界での人気商品だ。タッチスクリーンで動か

す小型パソコンのような物と考えればいい。
だが、今までの雰囲気とはどうもかけ離れた物だったため荒波もビックリしてしまった。
戦いは剣や槍を持って行うのに、情報収集は電子機器を使う。
人間界での生活に慣れた荒波にとってはシュールな光景に見えた。
「便利なんだぞ。仕事の度に新しい情報が送られてきて」
「どこから送ってくれるんだよ？」
「……ＴＳＯを支えている人達？　かな」
なんて表現したらいいのか分からない感じの受け答えだ。
「今日は持ち去られたこちらの機密情報を奪還しろという依頼だ」
針沢が指で画面を動かす。
「１時間前の監視カメラの映像だ。裏路地に設置されてた民間の物だから画像は荒いぞ」
針沢が映像を拡大する。
「なあ、コレどうやって手に入れたんだ？」
警察かなんから提供されたのかと持ったが。
「ま、いろいろ方法はあるんだ」
怪しげな顔でそう言われると、絶対に正しいやり方の結果ではない気がしてきた。
トランクを抱える老人が一人、その周りを三人の護衛兵が囲んでいた。
甲冑と荒い画像のせいで顔までは見えないが、こちらが味方だろう。
「この老人が持っているトランクの中にＩＣチップが入っているらしい。問題は３０秒後――――――」
荒波が画面に目を戻すと、一人の護衛槍を構えるところだった。
必死に何かを注意しているところを観ると、敵襲みたいだ。
そのあとはあっという間だった。数十人の銃を持った奴が来て、老人が抱えていたトランクは簡単に奪い去られてしまった。
針沢はここで映像を終了させると、雰囲気どうりの口調で荒波に

一言。
「俺とおまえでこいつを取り返す」

◆◆

「じゃあ、行くぞ荒波」
荒波の服の上からロングコートを着込む。このロングコートはＴＳＯに入隊と同時に長老からもらったものだ。体をつつみこむ色は夜の闇のような黒。
二人はバイクに跨(またが)り、エンジンを掛ける。
ブルン、と威勢の良い声を上げ、再開を喜んでるようだ。
勢いよく加速した青いバイクは一気に海辺に出る。
二週間前はここを逆走してティリスミナリアに向かっていた。そう考えると荒波はなんだが遠い過去のような気がした。
機密情報が盗まれたのは輸送途中だったらしい。
人手が足りないティリスミナリアの軍は防衛にまわれる人数にも限りがある。底をまんまと突かれたわけだ。
「機密情報って何が書かれてるんだ？」
ふと疑問に思ったことを、後ろの針沢に問う。
「よく分からん。チップを奪還しろと言われただけだからな。ただ……」
「ただ？」
「荒波の『アイテール・シエル』について、何か分かるかも知れない」
「……なんでそんなこと」

「俺の予想だと盗まれたのには、こないだの焼き払われた村のデータも入っていたと思う。お偉いさん達が無性に機密にしたがっていたのも根拠の一つだけどな」
「でもそんな物盗んで、人防は利益あるのか？　というかもう中身見られてるんじゃないか？」
「ああ、その点は大丈夫だ。何重にも暗号とセキュリティが組み込まれてる。いかに人防のコンピューターと技術者でもそう簡単には開けられない」
だが、荒波は安心しない。冷静な思考が答えを出す。
「……でも裏を返せば、時間があれば破られる、そういうことだろ？」
「言いにくいことをはっきり言うなあ。まあ利益があるかどうかは俺たちには関係ない。時間があったら聞いても良いぞ」
「答えてくれると良いけどな」
思わず笑いがこぼれる。
二週間の間に結ばれた友情は、確実に強くなっている。
たった二週間が荒波の人生を変えた。
この二週間を荒波生涯忘れないだろう。
時刻は6時を迎えようとしていた。横で太陽が海に吸い込まれるように沈む。

◆◆

荒波達が人防相手に戦うとき、絶対に気を付けなければいけないことが2つある。
1つ目は『新特殊庇護結界ＢＢ５／Ｓ』、通称防弾領域（ぼうだんりょういき）のことだ。
人間が使う拳銃や自動小銃を目の前にしても荒波達は立ち向かわなければいけない。そんな仲間達の命を最低限に守るために開発さ

れたのが、『新特殊庇護結界ＢＢ５／Ｓ』だ。
予め(あらかじ)、３センチ四方の小さな紙に組まれた術式から展開するため、持ち運びや使い勝手が良く『怪物の血縁(モンスターブラッド)』だけでなく『神の血縁(ゴッドブラッド)』も使用している。
体の表面に展開すると防弾チョッキの様な役割を果たし、体に当たる弾丸を弾く。
しかしこれにも強度があり、何十発も続けて命中すると術式が破壊されてしまう。
強度は様々だが、強度が上がる事に重さが増し移動速度が鈍るため強力だから良いというわけではない。
そして二つ目は、これは人防だけに限らず人間界で戦う場合すべてに置いて気を付けなくてはならないことだ。
即(すなわ)ち、妖力の使用だ。
『怪物の血縁(モンスターブラッド)』、『神の血縁(ゴッドブラッド)』は純粋な神や怪物と違い、妖力に限界があり、なくなると生命活動に支障が出る。
別次元(ディメリクス)で暮らしている場合は周りの空気に含まれる妖力を呼吸と共に吸収して確保しているが、人間界ではそうもいかない。
人間界の空気には妖力は全く含まれていないためだ。
別次元(ディメリクス)ではできた妖力を使った剣技も、人間界では使用を考えないと命取りになってしまう。
そのため、人間界での戦闘は単純な近接戦闘と銃撃戦を主(しゅ)にするのが基本となっていた。
「展開するぞ」
一通り注意事項を確認した荒波は我に返った。
二人は目的地の入り口近くで戦闘準備中。
防弾領域を展開し、二手に分かれて乗り込む。それが今回の段取りだ。
「俺は一番軽いのにしてくれ」
ポケットから二人分の防弾領域を取り出そうとした針沢の手が止まる。

「おいおい、確かに防弾領域は展開すると動きが鈍るけど、今日は安全第一の方が良いんじゃないか？」
「いや、俺も針沢と同じく軽めで良いよ。あんまり重めだと防御半端、攻撃半端になって逆にやられる危険性が出てくるからな」
どれだけ防弾に優れていたとしても、弾に当たり続けていたらいずれは破られる。
そんなことになるくらいなら、いっそ避け続ければいいのだ。荒波はそのことを言っていた。
針沢は数秒考え込んだが、「分かった」と了承しポケットから朱い紙を渡す。
そしてもう片方のポケットにも手を入れた。
「ほら、これ歯に付けろ！　通信機だ。小声でしゃべるだけで俺と通信できるから。受信機は耳な」
針沢の手には銀歯の様な物体が乗っている。怪しまれないため似せているのか、一目では通信機とは分らいだろう。
荒波はそれを奥歯に、受信機を耳の穴に入れた。
思ったほど居心地悪くはなく、チッという軌道音が鳴った。
「へえ、便利だな。こんなのどこで売ってんだよ？」
「ＴＳＯの潜入ミッションのために支援部隊が作ったオリジナル品だ。大事に扱えよ」
「じゃあ、いろんな人の声をまねられる蝶ネクタイとかサッカーボールが飛び出すベルトとかも欲しいな！」
「おまえ……支援部隊をなんだと思ってるんだ？　残念ながら、どっかの少年探偵の秘密道具は再現できないよ……」
「そうなのか？　支援って他にどんなことしてるんだよ」
「まあ、時季に分かるさ。作戦開始５分前だ――――――」
針沢がＳ＆Ｗ　Ｍ１８を実体化させる。
１キロ近くある物を軽々と回し、顔の横でぴたりと止めた。
「あ、そうだ」
針沢が思い出したように、荒波に言った。

「ん？」
「途中で司令部から連絡はいるかも知れないから、そんときは従ってくれ」
「司令部？　何だよそれ」
「もう時間がないから。まあ……行くぞ！」
誤魔化す様に歩き出す針沢。
疑問はたくさんあったが、荒波としては目の前のことで精一杯だった。

◆◆

工場の入り口近くの開けた場所で、重装備の兵隊が入り口付近を見つめていた。
このアジトに超機密級（トップシークレット）の物が運び込まれた、兵達はそれだけしか聞いていなかった。
いつものように指定された場所を見張るだけ。侵入者には容赦なく銃弾を浴びせかけるためにここに立っているのだ。
だから、当然見知らぬ人間が入ってきたら身元を確認するまでもなく撃ち殺す。例え民間人でも見られたからには生かしてはおけない。
そんな兵士達でも引き金を引くのを躊躇（ちゅうちょ）してしまう人間とはいったいどんな奴だろうか。
黒いロングコートに黒の瞳、そして漆黒の長い髪。人目で美しい少女だと思ってしまう見た目――――――荒波万。
彼らはそんな人が悪意を持っているとはそのときは全く思わなかった。
……そしてもう一つ。これからすぐに、その細い腕に黒光りする

ものが握られるなんて本当に考えもしなかった。

1-（4） 進入（後書き）

1-（5）　トランク奪還（前書き）

1-（5） トランク奪還

荒波の進入に驚いている黒服の男達に向けて、右手の黒い物体（オブジェクト）Ｍ１９１１の引き金を立て続きに絞る。

１０人の警備員。

いや、アサルトライフルを装備しているところからして兵士に近い存在だ。

乾いた音が響き、一番近くの黒髭（くろひげ）が倒れる。

しかし他の兵達が状況を理解するにはちょうど良かったはずだ。

兵達は本能的に悟ったことだろう。荒波の目的が『襲撃』だということ、そして攻撃しなければこちらが危ないと。

すぐさま陣形が組まれ、１０の銃口から荒波に向けて５．５６ミリの鉄の塊が発射される。

伏せるヒマもないほど高速で迫ってくる弾。荒波はそれを人間離れした動体視力で捉えた。

そして、同じく人間離れした反射神経で右手の『アイテール・シエル』を回す。

剣先からオレンジの光が出るたびに弾がたたき落とされ、鉄くずと成していく。荒波の思考と反射の融合、そしてこの銀色の剣だからこそできる芸当。

「な……なんなんだ！？」

驚愕の声を漏らしたのは、どんな戦場でも慌てないよう訓練されているはずの兵士達。ヘルメット越しでもその顔が分かるくらいだ。

無理もない。

突然、民間人が絶対に来ないような所に黒髪の女の子に見える子が入り込み、しかも致命傷になりそうな弾丸を全て剣１本で防ぐという狂気じみた行動をやってのけたのだ。

ほんの一瞬の出来事とはいえ、隙ができてしまう。

荒波はそのわずかな時間で近くの柱に身を投げだし、隠れる。
「っは！　……やっぱ実戦は厳しいな」
軽く息を弾ませながら実弾との対決を思い出す。しかしもたついてもいられない。
「回り込め！」
指揮官の大声でどたどたと重い足音が聞こえた。弾倉（マガジン）を入れ替える音もする。
だが荒波の思考も負けずに動いていた。
一時で敵の場所を把握し柱から飛び出す。
兵士達は引き金（トリガー）に力を掛けたが、既に荒波は速度を上げて弾丸に当たることはない。
人間の集団と単独で戦う場合、勝利の鍵（かぎ）はスピードだ。
相手の動体視力で正確に捉えられないほどのスピードで走り、死角から一気に敵に突撃する。それが出来なければ無数の弾丸に一瞬にして殺されてしまう。
しかし、人間にだって限界はある。目で見てその情報を脳に送り、そこから指先に命令を出すまで早くても０．２秒ほど掛かる。その間に弾丸の狙いから逸れられる速度を出せればたいていは当たらない。
荒波は高速で移動し、兵士達の後ろを取る。そしてそこから相手に向かって、走り出した。
「！？」
またもや驚きの色が走った。銃口に向かって正面から突っ込まれたからだ。
だがその行動だけでも、荒波に時間を与えてしまう。
荒波は距離を詰めながらもＭ１９１１を撃ちまくる。弾丸は右端の兵から順番にを貫いた。あちらから飛んでくる弾丸は、『アイテール・シエル』を使い防いでいった。
１？の狂いもない軌道で剣を動かし、的確に弾丸を弾く様は兵士達には怪物に見えただろう。

「てめえ！」
１０人いた兵が半分ほどに減ったとき、真後ろにいた指揮官がアサルトライフルのスコープに目を付け、走り出した。。防戦一方だと思っていた荒波もコレには慌てた。完全に背中を向けていたからだ。
大きく丸い目が荒波を睨む。もう距離は３ｍも無い。
（やばい、こんな至近距離で撃たれたら……）
考える余裕はない。
指揮官の指が引き金（トリガー）に掛かる刹那、荒波は攻撃に転じた。
逆手に持っていた『アイテール・シエル』を順手に持ち直す。振り向きざまに姿勢を低くし、一気に懐に潜り込んだ。
ズバアアァァン！！
防弾チョッキを切断し、その下の物全てを切り裂いた様な音がした。
流血が飛ぶ。
今まで、荒波の攻撃は拳銃メインで剣は防御に回していたが、それは中距離での戦闘の場合だ。それよりも近く、近距離戦闘の場合は逆に拳銃で牽制しながら、攻撃は剣がメインなるのは考えてみれば当たり前のことだ。
中距離は銃で前に、剣で近距離。
剣と銃の二刀流。
それは様々な場所で、様々な能力を持つ種族との戦闘を想定し編み出された流派だった。

数分後。
残りの兵士達は荒波の手によって戦闘不能にされていた。指揮官を秒殺されて逃げ腰になっている敵を倒せないほど荒波も柔ではない。
しかし、兵の逃げ腰の原因ともいえる指揮官の秒殺も半分は紛（まぐ）れ

のような物であった。
　もしあの時回避行動を取ったり、少しでも別の方法で攻撃していたら荒波は間違いなく蜂の巣状態であった。
　なので余裕綽々（よゆうしゃくしゃく）の顔をしていても内心は、
（やっべ、マジ危ないと思ったわ！　きゃー！！）
　だが油を売っているヒマはない。荒波は表から進入した針沢に連絡を取る。
　この工場からトランクを奪還するにあたって、針沢は囮の役だった。兵をほとんど引きつけてくれる針沢はどんな戦闘してるんだろうか、と少し気になっている。
「こっちは警備兵を無効化した。そっちはどうだ？」
『ザッ……そうか無事か。そのまま奥に行ってくれ。トランクの場所は後から連絡する』
「ん？　場所が分かっているならもうちょっと詳しく教えてくれないか？」
『悪いな。今ちょっと取り込んでてな。それに場所は俺も知らない。たぶん後から連絡してくれると思う。今きっと解析してる。じゃな！』
「お、おい！」
　言いたいことだけ喋って切られた。
　背後から銃声が聞こえていたので、戦闘中だったのかも知れないがあれくらいでやられる奴とも思えないので心配はしなかった。

　針沢との連絡から１０分後、警備の目を避けるために姿勢を低くしていたときにその通信は耳に入った。
『そちら荒波さんですか？　応答願います』
　この場に合わない落ち着いた女性の声だった。荒波は思わず大声を上げそうになった口に手を置く。
「えーっと……君誰？」

あまり考えもせず口に出したのはたった4音の素っ気ない問い。こちらが自分を知っている前提で話しかけているのなら、気を悪くしてしまうだろう。

案の定高い声で、

『え？　私のこと知らない！？　司令部の天知霙（あまちみぞれ）ですよ。』

フルネームで名前を紹介されたが、もちろん荒波は天知なんて女の子は知らない。この二週間、ティリスミナリアの中で初対面の人に何人も知り合ったため、その中の一人だろうか。

『針沢さんから何も聞いてないんですか？　司令部からの情報は荒波さんに繋げと言われたんですけど……』

そんな困った声を出されても荒波はどうにも出来ない。通信機の向こうではきっと可愛い顔して悩んでいるのだろう。そんなことを考えていると、突然、作戦前の針沢の一言が耳に浮かんだ。

――――――「途中で司令部から連絡はいるかも知れないから、そんときは従ってくれ」

「もしかして司令部！？」

またもや大声を上げてしまい、口を塞ぐ。警備兵に見つからないか本気で心配になった。

『だからそう言っているじゃないですか……』

そう言われ、ため息をつかれてしまう。だが先ほどだって針沢は司令部なんて一言も発してくれなかった。否は針沢にもあるはずと荒波は思った。

少し往生際が悪いが言い訳をしてみる。

「すみませんでした。針沢から詳しく聞かされていなかったんで、その……名前も初耳でした」

いかにも言い訳っぽい弁解しかできなかった。これでは相手に怒られるも当然だ。

しかし天知は

『え！？　針沢さん言ってなかったんですか？　あ、こちらこそ申し訳ありません。荒波さんにはあたるつもりは無かったんですが。

いえ、悪いのはすべて針沢さんですので……』
彼女は初対面の相手にとても気を遣うらしく、これでは針沢が１００％悪いことになってしまう。荒波はなんだか針沢に悪い気がしてきた。心の中で懺悔（ざんげ）する。
『あのぅ、解析した情報をお話ししてよろしいでしょうか？』
荒波が原因だというのに、話を切り出すのに自分が悪いように区切る。なんだか変におだてられているような気分で歯痒かった。
「あ、別に気にしないでください。針沢も忙しくて大変だったんですよ。それでトランクはどこにあるのか分かったんですか？」
このままではどこまでも控えめな態度で接してきそうだったので、荒波の方から軽めな感じで話を持っていく。狙いどうり天知は真剣に、落ち着いて話し始めてくれた。
荒波は今度こそ一字一句見逃さないように耳を傾けた。

1-（6） 鋼鉄のホールドアップ

荒波は鉄で出来た通路に無造作に詰まれた荷物の後ろにいた。まだ警備兵の足音が聞こえる。

風投資が良くないのか、気温は高いままだ。昼間は初夏（しょか）の快晴だったため、日が西の空に消えても熱が建物に残っているのだ。

『トランクはこの廃工場に運ばれた後、３階の部屋に運ばれたようです。誘導するので確保をお願いします』

「分かった」

『まずそちらの現在位置を教えてください』

「入り口から５０ｍ先の階段を上がり、二番目の角を左に、次の角も左に曲がりました。４０ｍ前に？中央通路Ｃ？との表記を確認したので今はそこだと思われます。」

荒波は考える素振りを見せず、文章を読むようなスピードで言った。

『……凄い正確さですね。こちらの予測とピタッリじゃないですか。何で分かったんですか……？』

予想外に怪訝（けげん）な声を上げられてしまった。。やはり誰でもそう思うのだろうか。通っていた学校でもこの記憶力がばれたとたん化け物扱いだったのを思い出す。

「……すみません、気持ち悪いですよね。俺はこれしか特技が無くて……これからはそちらの指示に」

荒波が喋り終わらないうちに、天知の慌てた声が遮った。

『え、えええ！？　あの、その、こちらこそすみません。別に荒波さんの能力に納得いかないわけでは無く、というか特技なら他にもあるじゃないですか。噂は耳にしています。能力覚醒初日で人防の追っ手を返り討ちにして、剣術もの上達も最速だったらしいじゃないですか！　ってあれ？　話題がずれてました？　で、でも……みんな荒波さんに期待してると思いますよ！』

天知はこう言ってくれるが現実はそう甘くない。八岐大蛇の力を受け付いているというだけで嫌な目で見る人もいた中、二週間で見せた荒波の実力のせいで、同年代のＴＳＯや他の部署の同年代から妬まれているのだ。

城下町の人達よりも城の中の人間の方が的が多い気がするのはどういうものだろうかと思っていた。

だからはっきり言って天知の様な人は貴重だった。そうなると通信機越しではなく面と向かって合ってみたい気もする。だがそんな悠長な考え事もしてられない。

『あの……』

「なんだ？」

今は１本道を進んでいるなので誘導は必要ないはずだ。

（とすると臨時の連絡か何か？）

しかし予想外に、謝られた。

『ホント、先ほどはすみませんでした。』

「――――――ッ！？」

何事かと思ったが、先ほどの勘違いのことを謝罪しているらしい。

「いえいえ、別にそんな気にしないでください。記憶力くらいしか特技がないもので」

さっきのやり取りを聞いていたら、たぶん９０％くらいの人は、荒波は悪くないと思ってくれるだろうが、そんな理屈はどうでもいい。

１０分ほど前に司令部の男達から抜け出した天知に、散々謝られたのだ。急にまた恥ずかしくなったのだろうか。どちらにしても忠実（まめ）というか堅気（かたぎ）というか彼女らしかった。

忘れているかも知れないが、今は潜入中なのだ（存在はばれているが）。今だって荒波は古い自販機の後ろに隠れて、横目で兵の動

きを探っている。
『トランクは、その角を右に曲がって突き当たりの部屋に保管されています。それから……』
「それから……何？」
『それから、トランクの中身の情報は閲覧（えつらん）しないでとのご命令です』
「え、……何故？　……まあ良いです」
『お願いします』
「了解」
だいたいの徘徊兵は針沢の相手、警備兵も無力化してきたのでこの辺りに兵はいない――――――はずだったが忘れていた。
角を曲がろうとしたときに、扉の前の見張りに気がついた。慌てて体を引き戻す。そして目だけを出して、改めて確認した。
「扉の前に5人の見張りを視認。武装はアサルトライフル。指示を」
『分かりました。扉に通じる道には遮蔽物がないため、前方から一気に突っ込んで無効化してください。アサルトライフルなら超至近距離での戦闘が有利です』
「了解」
『急いでください。トランクに掛かっていたセキュリティがもうほとんど無効化されています』
天知の告知が終わると同時に荒波は通路に飛び出した。当然、兵達もそれを観ていただろう。
遮蔽ぶつどころか壁にも凹みの一つもないこの道を突っ切るには、どうしても小銃の砲火を浴びなくてはならない。そんなことは承知済みだ。
姿勢を低くし、迫ってくる数多の弾を『アイテール・シエル』で防ぐ。
狭い通路では無意味に左右には動かない方が良い。アサルトライフルの撃った弾など標的に全て当たるわけではない。半分は逸れる。しかも兵達は突然のことで、誰一人としてスコープを除いていない。
3秒で距離を詰め、『アイテール・シエル』を手放し相手の視界

から消えるように真上に飛ぶ。
一人目は右膝、着地して二人目を回転蹴りで無効化する。そこで荒波に一瞬間が出るが、兵は銃は構えても引き金を引かない。
それもそのはず。兵達は跳弾を恐れていたのだ。
こんな至近距離でアサルトライフルを発砲すれば貫通は避けられない。そして貫通すれば壁や天井に当たって、自分か仲間に当たるかも知れない。そんな確率の低いことを一時考えてしまった。
荒波もここを警備しているくらいだから、それくらいは考えるだろうと踏んでいたのだが的中ようだった。
次の瞬間、3人目をあごの下から拳を入れ、首を掴んで4人目のほうにそのまま投げた。
グシャ、と音がしたことから骨の一本でも折れただろうが、命を脅かすほどの速度では投げていない。
そして最後。5人目は簡単に気絶はさせない。
跳弾を考える必要が無くなったためか、アサルトライフルを標的に向ける。だが当に荒波は行動に入っていた。
右足を振り上げてアサルトライフルを下から蹴り上げ、その勢いのまま体ごと空中で回転する。反動で後ろに兵が倒れる。
蹴り上げられた衝撃から立ち直ったころには、荒波のM1911があごの下に当てられていた。
「ど、どうなってやがる……おまえなんなんだ？」
兵が苦し紛れに尋ねてきた。血の気が引いているのが分かる。
「黙れ、カードキーは？」
「し、知らない……」
荒波は、ドスのきかせた声と怪物のような顔で鼻先の顔を睨む。
引きつった顔の兵が、唾を飲み込む音がした。恐怖の色が見える。
もう一押しだと荒波は思った。
荒波も出来るだけ人は殺めたくない。目の前の男もカードキーを出さなければ殺してしまうかも知れないのだ。どんなに勝手な言い分でも奪う命は少ない方が良い。

だからこれはシラをきり通させないための言葉だった。
「殺すぞ。さっさと言え。」
M1911の銃口をドライバーのようにねじ込ませる。
「う、内ポケット……」
「サンキュー」
相手の首筋に鋭い手刀を入れる。
「か、怪物だ……」
荒波は既に気を失っている兵に目を向けた。聞こえに後分かっているからこそ、その一言を口にした。
「そうだよ。俺は怪物なんだ……」

◆◆

1-（7）　流れる銃弾

（荒波は上手くやってるのか？）

コンクリートに囲まれた広い場所で針沢は敵との交戦中だった。

時間が無くて詳しく天知のことを話していなかったため、荒波は対応に困っていることだろう。

だが、無事トランクを持ち出すことを願って、こちらはこちらの仕事をこなさなくてはならない。

荒波の方の敵を出来るだけ少なくする囮役。

「損な役だな……ったく」

食品生産の大きな機械の後ろから飛び出し、S&M19を乱射する。もちろん全弾命中するとは思ってない。これは牽制（けんせい）だ。悠長に狙いを付けているヒマがあったら、針沢の体は風穴だらけにさせられる。

針沢は今、走り回って戦闘にはなるべく持ち込まない戦法を取っていた。目的の分からない相手側にとっては小賢しいかぎりのはずだ。指揮官らしき男がを指示を飛ばしている。

苛立った声で「回り込め、絶対に殺すんだ！」「右に行ったぞ！」などと指示を飛ばしている。

少し前は「捕らえて喋らせるぞ」などと叫んでいたくせに、今は抹殺する気満々だった。

針沢の妖力はあと3分の2ほど。まだ能力を使う余裕はある。

「『北欧の魔剣（ダーインスレイヴ）』！」

紫のオーラに包まれた針（ピック）は、小隊を的確に串刺しにしていく。余裕があったら動きを止めるツボをサスのだが、よく狙ったわけではなかったので相手の命の保証は出来ない。しかし小隊は的確に分断されていた。

この隙に針沢は機械の陰から飛び出し、兵の横を走り抜ける。

針沢としてもそろそろ限界かと思っていた時だった。耳の通信機

から待ちわびた相棒の声が聞こえた。
『針沢、トランクを入手した。脱出するぞ』
「遅かったじゃねえか！　バイクは俺が持って行くから表で待ってろ！」
荒波の状態は訊かなかった。針沢には無事と言うことが分かっている。
出口はすぐ真後ろ。針沢は足下にスモークグレネードを爆発させ、狭い通路に転がり込んだ。
（相手が暗視スコープを持っていないことを祈るしか無いな……）
針沢は体勢を低くして走り出した。

◆◆

鉄のドアを開け放ち、荒波が大きな駐車場に飛び出した。夜風に黒髪が舞う。
後ろにそびえ立つのは鉄の建物。針沢がいるのはここの丁度裏だ。
ふと、足音や大声が近づいているような気がした。
荒波は危険を感じ、取りあえず手近な茂みに身を隠す。駐車場と言っても元々は社員用だったらしく、クルマは一台も止まっていない。身を隠す場所は茂みしかなかったのだ。
人防の連中もようやく現状を理解したのか、トランクを取り返そうと躍起になり始めた。
そのトランクは、今荒波の手の中にあるのだが。
ドカン！！！
何かが爆発する音がした。荒波が振り向くと、どうやら針沢がいる方角のようだった。

この状況はいったいなんなのか、荒波には分からない。針沢の安否を心配していたその時。
『ズッ……波か？　あと1分でそっちに行く！』
「針沢！　大丈夫なのか？」
耳元から聞こえたのは紛れもなく針沢の声だった。声の様子からして必死なのは分かる。
『……帰ったらうまい飯でも喰わせろよ……』
「お、おい――――――！」
爆発の中を走り抜けながら、話題が飯とは針沢なりのジョークだったのだろうか。
実をいうと爆発音は、針沢が逃げながらグレネードやら手榴弾やらを投げているだけなのだが、荒波はそんなことは分からない。
ガチャン！
ついさっき荒波が通った扉を開け放ち、追っ手の兵が出てきた。
『溢れ出た』という表現はこのような時に使うのだろう。荒波が無効化してきた戦闘兵とは明らかに違う重武装だ。人数にして１０。
荒波は茂みの中で息を潜めた。
仮に戦闘になったとしても、圧勝するとは思えない。防具が厚いため、こちらの弾丸も体術も利きそうにない。妖術を使えば一掃できるかもしれないが、後のことを考えれば温存するのが妥当だろうと考えたのだ。
幸い、荒波のいる場所は真横からは丸見えだが、正面は植物が生い茂り発見は困難だ。追っ手は見当違いな方向に向かおうとしているし、針沢が静かに回収してくれれば無事に脱出できるはずだ。
と、その時いくつかのことが同時に起きた。
バイクの走ってくる音がしたと思ったら、荒波を強い光が照らした。そして待ちわびていた男の声がした。
「荒波ー！　無事かあ！！」
聞こえないふりをしても無駄だった。針沢だ。針沢が迎えに来たのだ。

タイミングの悪さに唇を噛む。
針沢が照らした光のおかげで荒波の居場所はバレバレ。しかも名前まで叫ばれてしまった。もう泣いても観念するしかない。
「いたぞ！」「撃てえ！」
転がり出た瞬間、荒波を無数の弾丸が襲う。
「くっ――――！」
右手を閃光のように煌めかせ剣を振るう。数が多いせいで、致命的な弾丸だけを捌いているがいつまでもつかは不明瞭。しかも拳銃の弾は重装備の上からでは通らない。
ここで立ち止まったところで生きてはいられない。そう直感すると身体能力の限界を出して走り出した。
最小限の防弾結界と荒波の身体能力だけでどこまで弾丸を防げるかは分からない。
弾丸が体に当たらないよう出来るだけ不規則に移動する。それだけで大半の弾は当たらなくなる。
ただ、数が数だけに体に触れてしまう弾丸もあった。
針沢が声を張り上げて右手を伸ばす。針沢はバイクで走り抜けると同時に荒波を乗せる算段らしい。タイミングを合わせろと言っているらしかった。
「――――ッ！」
遂に背中に衝撃を感じる。防弾結界で守りきれなかったのだ。体に刺さってはいないとはいえ、反動で姿勢が崩れた。
「――――荒波！」
「くっそ！」
このままでは荒波のほうが先にポイントについてしまう。針沢はもう見えているが、ここに来るにはまだ時間があるのだ。かといってここから動いてしまえばうまくバイクと接触できない。
出し惜しみはやめだ。
歯を食いしばり、スピードにブレーキをかける。足元から火花を散ったがなんとか止まった。

荒波は防御妖術の技名を発声させた。
「――――――『洪水流盾（フラッド・バックラー）！』
ズザア！！
弾丸が止まった。
正確には幅３ｍの水の壁に阻まれたのだ。手を付いたコンクリートから出る、滝のように吹き出す水が上に向かっている。その水は絶えることが無く常に壁の形状を作っていた。
荒波の防御妖術式だ。これで針沢が助けに来るまで、この技で持たす。
『水の壁』といってもただ勢いよく流しているわけではない。壁に弾丸が触れた瞬間、同程度の力で押し返し見時の流れに巻き込むのだ。豪快な技だが、繊細な技術も必要。
兵達も技名からして何が起きているのか理解している物も少ない。
『技名発声』も妖術を使用するのに大事な条件の一つである。妖術というものは、どれだけうまく術のカタチを頭の中に思い描き、それを3次元上に構築できるかで決まってくる。しかし、いくら正確に構成したとしてもそれを一気に解放するにはタイミングを合わせる必要があるのだ。そのタイミングを合わせる術（すべ）が『技名発声』だ。技名を引き金（トリガー）にして妖力を凝縮、解放することによって初めて、妖術が完成する。
『怪物の血縁（モンスターブラッド）』や『神の血縁（ゴッドブラッド）』問わず使う、言わば魔法の呪文ようなものなのだ。
針沢は荒波の技名が耳の入ったのと同時に、意図を悟る。
針沢は荒波の横腹と接触するギリギリを駆け抜けるラインを描いく。
止まる必要はなかった。
絶妙な距離と力でバイクの後部に飛び乗った荒波。
「行っけえええええ！！」
荒波が叫んだのか、それとも針沢の声だったのか。それとも同時に出したのかもしれない。

ギャギャギャギャ！！
タイヤと路面のこすれる音がする中、二人を乗せたバイクは疾走していった。
供給される物が無くなった水の壁が遂に崩れたが、そのときにはもう兵達の銃口は明後日の方を向いていた。

ほとんど人の動きがない真夜中の国道。その中を鋼鉄の騎馬が走行していた。
鋼鉄の騎馬――――――蒼のバイクの運転は針沢、その後ろに荒波という行きとは逆の配置になっていた。
「にしてもおまえも運転できたんだなあ。教えてくれれば良かったのに。いろいろ会話の種になりそうじゃないか」
「俺は最初、仕事のために覚えさせられたんだけどな。だんだん楽しくなってきたわけだ。でも見ての通り荒波よりは下手だろ」
「そうか？」
「でもな。久し振りだから面白くなってきたよ」
「針沢は自分のバイクをなんで持ってない？」
「んな金ねえだろ！」
値段の問題を出してきた。
しかしこのバイクも荒波の物というわけでもない。前のバイクは弾丸を受けて、半分以上のパーツを取り替えた結果、外装以外は全部違うパーツとなってしまった。
厳密に言うとＴＳＯのミッション用のような感じだ。
「取りあえず合流ポイントに急ぐからな」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6545s/

神話を受け継ぐ者達　～人間の価値観が創りだした世界の中で～

2011年10月27日03時15分発行